
とある化物の拡散力場

龍輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある化物の拡散力場

【Nコード】

N3651M

【作者名】

龍輝

【あらすじ】

暗き道標、うやむやな覚醒。きやま あきら木山昌が目覚めた先に待っていたのは、人口二三〇万、学生一八〇万を占める街。通称『学園都市』そこでは、時間割り《カリキュラム》と称された能力開発が盛んに行われていた。昌はまだこの世界にきたばかりで当然能力の使い方も知らない。例えばその体が気絶している最中に一応の能力開発を行い、あとは、自分だけの現実を自覚するのみだろうが。しかし、昌はただの異世界人ではなかった。パーソナルリアリティーいや異世界人だというだけならば、ただの、なんて言葉は違うだろうが、ともかく。そんな周りとは違

う環境に住んでいた昌を待っていたのは、某不幸少年でも魔導図書館でも、ましては電撃姫でもない。そう、それは、あれは。――吸血鬼

プロローグ

茶髪と黒髪を合わせたようで、ボサボサした髪を印象させる少年は手を伸ばす。

目の前にいる、『親友』を危険な場所に行かせないために――

ツンツン頭の親友こと、上条当麻には不思議な右手があった。

この世界では、普通に科学で証明できた能力、簡単にいえば電気分解のようなものを想像出来ればいい。

上条は、その右手を魔術の核となる黒い球体へ手を伸ばした。自分たちが、本来いるべき世界へ戻るために――。

無事なんて考えていない、ただ自分がやりたいと思うことをやっているだけ。

考えてみよう、あなたの命で世界を救えるからその命を差し出せ、と言われたら。漫画やアニメにでる主人公は迷わず差し出すだろう。しかし現実で見れば、自分の命欲しさに醜い争いが起きることは、ほぼ必至だろう。

それと同じ選択を上条は迫られ、そして迷わず選んだ。

主人公になる選択を――――。

「結局君が選ぶ答えはそれか……」

暗い道、いや、暗い世界にたたずむ一人の人間はそう呟いた。

大人にも子供にも見え、男にも女にも見え、聖人にも囚人にも見える人間。

アレイスターⅡクロウリ。

彼は、少年少女たちの活躍を一部始終見ていた。

さあ、戻ろう……。

人間は、元いた世界へ戻る。まるで、夜の海に潜るようにその姿は見えなくなった……。――。

プロローグ ニ

七月十四日、少年は目を覚ました。

「ここ……は？」

倒れていたところから、上半身だけを起こし、辺りを見渡す。

周りはほとんど暗かった。見れば窓がない、あるのは無数の機械、機械、機械。

その機械が発する光が、この広い空間を照らす唯一の光源だった。しかし、それらは少年の目には入らない。

その理由というのも、窓も扉も階段も存在しないその空間に、巨大なビーカーが存在していたからだ。

そのビーカーの中で赤い液体、弱アルカリ性を示す培養液に身を包む『人間』に目を奪われ、少年はそれを、本当に不可解な生き物だと思った。

男にも女にも見えて、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える、『人間』とでしか表現出来ない姿。故に『人間』

緑色の手術着と銀色の長い髪を液体の中でゆらゆらと逆さまになりながら佇む姿を、少年はそうとらえた。

「――ようやく目覚めたか」

人間がまず最初に開いた言葉はそれだった。

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも聞こえる声で。

目覚めたか、少年はこの不可解な生き物との関わりを持っていることがわかった。いやわかったというより、確信が持てた、と言ったほうが正しいか。

「それで、君はどうする？」

――何を？

「この世界で生きていくか、それとも帰る道筋を探すか」

理解も半々だった。そもそもなぜ自分がここで眠っていたのかさえ、わからない、覚えていない、にも関わらず、そんなことを聞いてくるのだ。

当然、混乱する。

別にこの少年は記憶喪失や、情緒不安定などではない。

きちんと今までの記憶は持っているはずであり、昨日食べた献立も答えられる。

もっと詳しく言えば、あやふやな記憶があった。自分が主人公で、アニメのキャラクターと一緒に悪者を倒す夢だ。

しかも現実味があって、その悪者がもう一人の自分という――、――イタイ、と少年はそこで思考を止める。

「まだ、わからない……」

少年が考えに考えて、悩みに悩んで答えた言葉はそれだった。

ビーカーに佇む『人間』はただ、そうか、と告げるだけ。

それから、そのただっ広い空間だけが、静寂という警戒と不安、疑念と苦悩が混じったものにとらわれる。いや、それは少年が感じているものだった。

人を信じられなくなった少年。

人間不審

不信。

だからこそ、目の前の『人間』から目をそらせないでいた。

「貴方は？」

そう問うのが精一杯だった。

『人間』は、そう問うだろうと予想していたのか、その表情に笑みを浮かべていた。

「私か？」

私の名は――」

——アレイスター。アレイスター＝クロウリー、この学園都市を
統べる者だ。

楽しむように、笑うように、それは告げた。

少年、名を木山昌きやまあきらと言うのだが、昌は第七学区の自分の家という
ものを書き記すメモと、入学やら能力やらの書類がぎっしり詰まっ
た肩掛け鞆を、肩に掛けながら（当然）ウロウロしていた。
ぶっちゃけ迷子である。

異世界、正確には平行世界。パラレルワールド

神様から何か能力を付けてやろうなどという、テンプレートな展
開は昌を待っていなかったらしい。

とにもかくにも、木山昌はアニメの世界に紛れ込んでしまった。

そこは転生者らしく、混乱しろよ。

とも思うが、実質、木山昌の許容量など、とっくの昔に超えている
のだ。

簡単に言えばやけくそである。

（はあ……、俺はあれなのか。もし敵に出会ったりしたら人生を説
けばいいのか？　なんて展開だよ……。そもそも俺何したっけなあ
……。やべ、軽く泣けてきた……）

これが、転生！？　やっほオーい！！　という人間なら、少なか

らずまだ気持ちプラスに働いたのだろうが、昌にはそれがなかった。

先程も言ったが、神様が、間違っ貴方を殺してしまいましたーっ！！とか言いつつ、貴方を他の世界に連れて行ってさしあげましょう、と繋げて、貴方の想像する能力を三つ与えましょう、という展開ならば昌も色々苦勞はしない。

だが、アレイスターがわざわざ昌を『助けた』理由もあり、無事昌にも能力はあるとのことだ。

どう考えても原作介入させられるようである。

「おい、そこのおぬし、止まれ」

しかし何が起こるのか、わかるわけではない。

昌が考えるのは、自分が介入してしまったことによる『新たな事件』。

そして言わずもがな、『元々の事件』。

「おーい、おぬしよ、おい聞こえてるじゃろ」

昌は、この物語の本を読んでいないどころか、アニメでさえ見えないのだ。

当然、何日から原作介入するのかさえ、皆目見当もつかない。

「無視するなアアアああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

直後、ドゴムッ！と何かが陥没するような勢いで、昌の足と足の間——詳しくはその痛さが尋常じゃないと思うため、伏せておく——に蹴りが入った。

「つつつつ！？ うオオオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！？？」

高校一年生が無様に、転げ回っていた。

言わずと知れた、今作の主人公である。

「か、かふ……てめ、クソ……」

男として、大事な部分を必死に抑えながら、昌は顔をあげる。目の前にいたのは、金髪の少女、いや子供だった。

外国人でもない限り、本当に鮮やかな金髪。例えるなら太陽の光のようだ。

「儂を無視するうぬが悪い」

ツンつと子供は腕を組みながら、昌を見下ろす。

苦しげに見上げる高校一年生と、見下ろす子供。

主従関係にしては、もう少し配慮が欲しいコンビだ。

「てつめ……、クソガキ、が。な、ん、のようだ………っ」

それを、非常に大人気ない、何度でも言うが高校一年生、昌が殺意を込めて睨む、にらむ……。

しかし

「すまぬが、ちょいとこの紙に描いておる場所に案内してほしいんじゃないが」

悲しいかな、全く気圧されずに道案内を頼まれてしまった。

立つ瀬がないとは、こういう場合にも使われそうだ。いやむしろ使われる。

「くっ、なんで俺はこんなにも無力なんだ……」

流石にこたえたのか、それとも痛みで泣けてきたのか、昌の目尻は熱くなるばかりである。

「……………貸してみ」

ようやく立ち上がれるまで回復した昌は、金髪の子供、幼女といっても過言ではないか、紙をとる。

「あれ？」

そこで、デジャヴを見た気がした。

慌てて自分が持っていたメモを取り出す。

何事かと金髪の幼女はそのメモを見つめ、昌の顔と自分の紙、そしてメモと順に見つめる。

簡潔に述べるならば、

「^どどういうことじゃろうな、全く同じ場所を指しているようにしか、
儂には見えんが」

プロローグ 三

驚きの連続だった。

もう自分の部屋が、他の学生の寮ではなくボロツちいアパートとか。

もう自分が高位能力者だったとか。

もう自分は無理矢理アニメの世界に引っ張られたとか。

もう自分の部屋の隣が、自分の担任の部屋だとか。

本当に色々と驚きだったが、自分の部屋に前途多難な道を辿って、ゴールした昌にまた驚いたイベントが待っていた。

「少し狭苦しいが、なかなか味わい深い部屋じゃのう」

「誰だよお前！」

部屋の畳、というより一室しかないボロツちいアパートの部屋は、玄関と台所にあたる部分以外が畳なのだが、そこで少女が転げ回っていた。

ぶっちゃけ先程出会った、金髪の子供である。

どうも、これはアレイスターの粹な計らいなのだろう、と一人思考するも、どうして異世界へ来て早々金髪の少女と相部屋なのだろうか？

全く理解出来ずにいた。

しかし、当の本人、金髪の少女はキャハハハ、ワイワイ、と無邪気のもんだ。

金髪の少女は、先程の木山昌の問いによくぞ聞いてくれたと言わんばかりの、キラキラした瞳で見つめる。

「よくぞ聞いてくれた、儂は名高い

吸血鬼の末裔じゃよ」

「……、ハア？」

（え、あれ、なに、ここってそんな世界だっけ！？ いや、確かにオカルトの領分だけど……ええ？）

吸血鬼が出るならそのうちドラゴンでも出てきそうだと昌は冗談混じりにそんなことを考えた。

まさかこの後の展開で、その一辺を見ることになろうとは思うまい。

問題は目の前の少女に、また向く。

「吸血鬼、……でも日光出てないか？」

吸血鬼、影に潜ったり、人の血を吸ったり、妙に怪力だったり、本当に何でも出来てしまいそうな能力を持つ。そして、それとは裏腹にニンニクや十字架、日光を弱点とする。

吸血鬼。

血を吸う鬼。

しかし、それに対しても、うう~~~~~と、畳を心地よさそうに転がりながら、満足しながら答えてくれる。

……むしろ日光浴してた。

「儂はな、特別にして異質な『血』が混じっとるからのう……、お主信じておらぬな？」

それは信じるほうがおかしいだろ、と内心呟く。

「じゃあ、お前何歳だよ」

「一〇〇〇歳じゃの」

「予想をはるかに超えた……!!？」

「ああ、違いの……、九九九歳じゃ」

「ほとんど変わらねーよ！ え！？ 俺の頭にあった少女像は！？ 既に頭の中にインプットされかけていた予想年齢を遥かに超えられてんですが!？」

「変わるわ！ 四桁じゃぞ！ 三桁と四桁の差は大きな差があるじやろ!? ぬしはあれか？ 二五歳超えた女性に対して『じゃあもう三十路ですね』なんて答えておるわけじゃあるまいの!!」

それに後半に関して言えばぬしの勝手な妄想じゃアアアああああ

ああああ!! と二人して白熱。

勢いは止まらなかった。「捏造だ認めろ貴様は一〇歳のロリだど！　そして言わせる俺はロリコンじゃねえと！　言わせるよ！　何で一〇歳超えて一〇〇歳だ！　常識的に死ねよ！　それか老けるかもちつと成長しろよ!!」

「おおおうえあいいうったなぬし？　うぬは立派なロリコンじゃな!？」　一〇〇歳じゃと立派なパクリになりかけるからあえて一〇〇〇歳と答えたと言うに!!!?」

「読者だった!？」

「一〇〇〇歳も生きておれば自然と娯楽に身を浸すわ!　おかしいじゃろ?　一〇〇〇歳のババアが老眼にもならず本を読みながら、ほほうこのキャラは儂に似てるのう、と一人で笑ってた儂を笑うがいいわ!!　そして店員に変態という紳士で何度連れ去られそうになったこととかの!」

急に高笑いしだす金髪幼女（自称吸血鬼）。

しかしそんな大声で口論するものの、そう長続きはしないもので。バンツと開かれる扉、玄関からドスドスと音をたてているように近づく足音、というより、荷物が元々あったため、玄関からは室内は見えない。

そして、段ボールの山から現れた。

「こらーっ!!　アパートで大声の口論はダメなのですー!!」
ちっこい子供だった。

無論、そういう話題をしていた二人は、同じタイミングでそれを告げる。

「「一〇歳のロリ!？」」

プロローグ 四

本気で怒られた。

それはそうだろう、騒音を生み出す人を注意しに来てみれば、その相手から子供扱いときたもんだ。

当然、というより必然、怒りのレベルも上がる。

「いいですかー？ 人を見掛けで判断しちゃダメなのですよー？

『兄妹』といっても、親しき中にも礼儀ありという言葉があつてです
ねー」

「ちょっと待ってください」

聞き捨てならない言葉が見つかったと、言わんばかりに昌は挙手する。

「俺と、こいつが兄妹？」

「違うのですかー？」

首を傾げる小さな大人に対し、ええ、と返した。

「こいつは何故か俺と同じアパート、同じ部屋があたってしまった
同居人です」

「うむ、儂が主でぬしが下僕じゃな」

ちげーよ、と脳内でつつこむ。

しかし、その答えに小さな大人は疑問を感じた。

「統括理事会からきちんとした書類はもらっているのですかー？」
カバンに敷き詰めたプリント、書類を小さな大人に渡す。

どれどれー？ と一枚一枚じっくり見ては、頷く、見ては、頷く。
「……木山ちゃんはウチの学校なんですわねー？」

ウチの学校？ 昌は問い返す。

このアパートの隣には自分の担任の先生がいることは、軽くクラ

ス名簿を見て、お隣の名札を見て、ああやっぱりそゆ展開ね、と早々に思考を途絶えさせていたが。

「そうです、私が木山ちゃんの担任の月詠小萌ですー」

「……………」

何故だろう？ 身近にちっちゃい子がもう二人も揃っているのは、とその時の昌は、そんな暢気なことを考えていた。

「ちなみに聞きますが、何歳ですか？」

「レディーに歳を聞くのは、野暮というものですよー？」
怖かった、笑顔がものすごく怖かった。

「そういえば、その女の子ちゃんは何かもらってないですかー？」
無反応、無関心、自称吸血鬼は小萌に対しての態度はそうだった。
ズイツと、無言で一枚の紙を渡す。どう見ても、先ほどの地図だ。
「むー……………」これは理事会に報告、です？」

クイツと、昌の袖が引っ張られる。

見れば自称吸血鬼である、金髪の幼女が凄んでいた。
察するに、その視線が何を訴えているのか。

なんとかこの女を止めろ。

そう訴えていた。

「……、小萌先生その件に関してはこっちで話して、警察か誰か専門の方に相談したほうが良いんじゃないでしょうか」

「先生も一応大人として、迷える子羊ちゃんを導く義務があるので
す。それに、木山ちゃんはまだ子供なのですよー？ この街について
詳しいのもどちらかと言うと先生が詳しいのです」

速くも不利だった。

「（まずい、立場的とか色々合わせてもこの先生に敵わねえよ、まさかこんなところでロリコンは正義という言葉とぶつかるとは）」
「（下僕よ、まともな発言をしようと言うのはわかるんじやが、自分の性癖まで暴露しているぞ）」

ガシツと握り合う右手、そこから鳴る握り合い。

「ほ、う？ 流石、自称吸血鬼だ、な。なか、なか強いじや、ねーか……」

「ふ、ん、儂にわたり、合う、だけの力があつたのは、褒、めて、つかわすぞい」

見た目一〇歳に、良い勝負をしあっている、高校生がいた。
言わずもがな、今作の主人公である。

「先生先生、この子まだ大人に慣れてないみたいですし、今だけは預かってもいいですか？」

小萌先生は、その言葉にちよっぴり残念そうな表情を浮かべたと、笑って言った。

「先生に対する態度と、木山ちゃんに対する態度には差がありますからねー、わかりました」

ホツと息をつく二人、そのうちの一人は、別に匿わなくてもいいのだが、目の前の状況的にそんなことを欠片も考えていない。

ただのバカだった。

でも、と小萌先生は繋げるように告げて。

「何か困ったことがあったら、迷わず相談して下さい、おーけーですかー？」

その場はとりあえず、一端の終わりを見せた。

プロローグ（前書き）

加筆しました！

プロローグ

後日談。

その日の夜の会話。

「のうお前様、結局儂はここで寝泊まりをするのかの?」

「あん? 別にどっか泊まる場所があるなら泊まらなくてもいいと思うんだが」

「いや、そうじゃないんじや……用事が終わればそれで終わるんじやが」

「用事?」

「いや、あまり気にせんでくれ」

そう言って、割り当てた布団に潜り込む自称吸血鬼。名前はまだ知らない。

彼女の口癖は、吸血鬼に不可能などない、だということがわかった昌は、自称吸血鬼、以降ロリ吸血鬼と呼ぶことにするが、とにかくすぐには寝れない。

「? お前様どうして寝ないのじゃ」

「ああ……昼間のうちに終わらなかった荷物整理をしなくちゃならないんだよ、ったく面倒くせえ……」

ちなみに、彼な口癖は面倒くせえ、らしく、大体は愚痴を言ったりして反発するのだが、なんだかんだ言ってやるのが昌である。

「……これじゃあ儂がただ寝そべっている子供だと思われそうじやの」

「え? 見たまんまそうだろ?」

「儂は大人じゃ!」

はいはいそうですねーと、すでに作業に入る昌。

昌も早く寝たいのだ。

「くっ……ッ! ふう……まあ怒っても仕方あるまい、どれ何をすればいい?」

「おおおお、偉いでちゅねえ。ほれ、飴玉あげる」

「わーい！　ってグルアアアアアアアア！　何儂を子供扱いするかアアアああああ！　一辺死にたいか！」

「待て、既に口調が崩れち待ってる！」

フーッ！　フーッ！　と危ない唸り声をあげながら、ギリギリのところで頭を押さえられるロリ吸血鬼。

「吸血鬼の次は蝸牛かよ……」

「……お前様よ、それはわかる者はわかるがわからぬ者にはわからないネタじゃぞ？」

メタ発言すな！　とロリ吸血鬼の頭をはたきながらつつこむ昌。

「そうじゃ、蟹を食べに行こう」

「おいコラ」

「蟹と言ったら北海道じゃから、ついでにニホンザルとマムシを見に行こう」

「唐突っ！」

「そうじゃ、白い猫を見かけたら餌をあげぬか？」

「羽○さん！」

「なんじゃまだ不服か」

「不服云々の前に他作品の話すんなよ！」

「お前様も十分メタ発言しとるじゃないかの？」

「お前のは重度のメタ発言してんだよ！」

ここに馬鹿なトークが繰り広げられるため、ここで切っておく。ただ言えることは、結局その日の内に荷物整理は終わらなかった、とだけ伝えておこう。

今日も朝日が射し込む。ここは二三〇万の人間が行き来する科学の街、学生が八割を占める、通称学園都市。

そこでは日々、超能力開発がおこなわれており、脳味噌に直接電極をぶっ刺されたりわけのわからないクスリを打たれたりして、全

く見もしないカードを透視してみせよやら、卵を転がさずに尚且つ壊さないよう念動力を使えよやら、そんな無理難題を押し付けることが当たり前の世界。

そんな世界で、彼は一筋の光にならなくてはならない。

彼にも家族がおり、そして心配してくれる仲間がいて、自分のことをもっと知らなくてはならない。

そのことを深く、深く胸に刻み、彼が誤った道に進まないことを、『少女』は願った。

——— 夢くて、苦しくて、罪悪感に苛む私を、貴方は許してくれますか？

——— もちろん許すよ、それが俺の取り柄であって長所であり、短所だから

プロローグ（後書き）

吸血鬼の話はしたほうがいいのか、少しかだけ悩んだので、その話は語らずに、次の話には『二日の空白』があります。

予定としては、禁書目録一巻の話が終わってから投稿しようと考えてますが、もし途中ででもいいから出して欲しいと考えている読者様がいたら、迷わずご連絡を。

超電磁砲 一

今日び、七月十九日。

本当なら今作の主人公である、ボサボサ頭の少年の転校初日である。

しかし、

「木山ちゃん？ きちんとお話は聞いていたのですかー？ 今日から学校は夏休みなので、転校生として高校に登校するのは夏休み明けなのですよー？」

そんな可愛らしい声で、しかも屈託のないような、それでいて苦勞する生徒を持つと笑顔になる、微笑みを浮かべた先生を目の前にした昌は。

（ぬオオオオオおおおおおお！！！！ 地味にキツイ！

一昨日から色々あったけど、かなりテンションが上がってたところにこれ！？ いやそれをきちんと聞かなかった俺が悪いけども！

けどさあ！ どうしてこう間が悪いかなあ！！）
畳の上で、頭を抱えながら転がり回っていた。

ちなみに、その色々あったことに関しては、今は触れないでいた
だきたい。

非常につまらない、中途半端なあのストーリーを語るには、まだ
まだ日が短すぎると思う。いつか機会があれば、語ろう。

そして、そんな転げ回る昌を見つめている、某ロリ吸血鬼、今は
自分の体を変化させて、同い年にさせている『少女』。

彼女の名は木山息吹。

名で縛られ、人間と同等の位まで落ちた吸血鬼。

血を吸う鬼。

今は血を吸う人。

しかし、関係性はほとんど変わっておらず、険悪なムードというより、むしろ夫婦のような仲の良さである。

その少女は、今日も窓、と言ってもガラスの前に障子があるが、その前でひなたぼっこしていた。それはもう、ぐだーと足を投げ出して、下着が見えてしまうんじゃないかと思うほど。

彼女にとって、一応主人である昌を心配はしてないようだった。転げ回る昌を、うざったらしく一瞥したあと。

「……うるさいのう、それが吸血鬼と契約し、同じ時を刻むことを覚悟させられた下僕としてどうかと思うがの」

「まあ待て、なんでそんな股開きながら嫌味を言うのか一度きかせてもらおう」

「かっかっか、青いのう……大丈夫じゃよ、下は何にも穿いとらん」
「何を安心しろと!？」　よかった!　最初っからそっち向かないで!」

「むしろ、息吹ルートに入るためのフラグをへし折ってるんじゃないかの?」

いらねえよそんなフラグ!　とご近所さんの配慮を全く気にしない音量で叫ぶ。

しかし彼女は知らない。語られていない話の中に、一度そんな美味しいイベントが既に起きていたことを。

これが、曲がりなりにも彼女のつきあい、日常である。

「ハア……まあいっか、夏休みの宿題とかねえみてえだし、有給休暇もらってると思えば軽い軽い」

そんな安っぽい考え方で、現状を甘く見た。

しかし、ふと気付くものがある。

一般の学生には全く気が付かないあることを。

(あれ、そういえばお金ってどうすりゃいいの?)

☆☆☆☆

「いらっしゃいやせー」

「違うよ、こう……『いらっしゃいませー！』て感じで腹から声を出すんだよ」

「いらっしゃいやせー」

「違う言うとするやろうがッ！！」

ゴツンッ！ と強烈な拳骨が炸裂する……ッ！！

怒られているのは、もちろんのこと今作の主人公だ。もうここまですでらしい主人公だと、いい加減見切りをつけたほうがいいと思うが、それでも一応『今作』の主人公であった。

ちなみに今の舞台は、ファミレス。

しかもそのファミレスで、昌は働いていた。

働く理由というのも、結論から言えば夏休みが明けるまで奨学金が出てこないからである。

隣にいる先生、月詠小萌に夏休みの間ずっと養ってもらう、という選択肢もあるにはあるのだが、それでも頼るわけにはいかない。

彼女には、償っても償いきれないことを、息吹はしてしまった。

そして多分事情はしらないのだろうが、連帯責任として昌も。

だからこそ、余計に頼るわけにはいかない。

しかし、その当事者である息吹にも働かせようとした昌だったが、まがりなりにも吸血鬼。

あっという間に息吹は昌の『影』の中に逃げ込んだのだ。

主人公として発してはいけない言葉を、その時何度も言っていたが、そこは割愛する。

しかし、さあ学生でも働けるバイト先なんかありますかー？と新聞のチラシを眺める。休みの間にバイトを探そうという学生も珍しくないのか、朝刊の新聞のチラシにバイト先一覧なるものがあったからだ。

奨学金だけでは生きていけない学生のためなのだろう。

しかし、昌にとってはどうも胡散臭そうなバイトばかりだったので、このアパートの大家さんに、何か良いバイト先がないか、聞いてみたのだった。

ここにすむ上にあたって、一応気軽に話す程度になった、管理人さんである。

「あん？ バイト先がないかって？ ああ……んじゃあ七学区のーほら、前に紹介したファミレスがあんだろ？ そこ行ってみろ」

薄着のシャツ、その上に肩まで切ったジャケットを羽織り、ボロボロのジーンズを履き、ジャケットのチャックは閉めない派なので、巨大な二つの山が、シャツから思いつき飛び出しているのだが、彼女『も』残念な女性である。もう少し大人の格好にするか、せめて自分のスタイルの良さを自覚すれば、幸せな家庭が築けそうなのだが。

とりあえず、昌は言われた通りのファミレスに来て、そしてすぐに従業員になれたのだった。

ちなみに、どこぞのヤンデレ超能力者（レベル5）や、ツンデレ超能力者（レベル5）がよく通っているファミレスだったりする。

「昌くん、とりあえず七番テーブルに昼食ランチセットとメロンソーダお願いねー、ほら店長も！ そのムキムキの筋肉を見せつけなくていいですから！ さっさとこっちに帰ってきてくださいー！」

「「はあーい」」

このファミレスのチーフを担当する女性、しかし昌も店長も、そしてここで働いている店員全員が彼女の名前を聞いたことがないので、皆彼女のことをチーフかマネージャーさんと読んでいたのだっ

た。

知的な眼鏡をかけて髪が短く、いつも何かをメモしている。誰も接客レジ料理をしているところは見たことがないらしい。

しかし、このファミレスがいまだに続いているのは彼女のおかげだろう。

彼女は主に事務関係の仕事全般を請け負っているからだ。

実質、本当の店長は彼女だろう。

店長に関しては、ただの筋肉ムキムキ熱血バカと考えれば、すぐに思いつくだろう。役割的にはほとんど用心棒だ。

あとは昌と一緒に入った、少女。

本格的なドジッ子巨乳ウェイトレスさんだ、と心の中で昌は驚嘆していたものだ。

しかし、容姿やその天然が混じった恥ずかしがり屋の行動が客を呼び寄せていることがあるため、ある意味期待の新人だったりする。

「おまちどおさま、メロンソーダと昼食ランチセットを頼んだお客様は？」

昌は出された料理をテーブルに運ぶ、客は今は三人程度だが、皿の数からして大体十人はいるのだろう。

「ああ、んじゃそこにおいというて」

「かしこまりました」

一応店員らしく、ご丁寧な挨拶をしながらメニューをテーブルに置いていく。

「でよー、そいつらが俺の能力見てかなりビビってたわけよ。ははっマジ笑えたわ！」

「お前やめとけて、俺たちは『幻想御手』^{レベルアップ}を使って強くなっちゃまったんだからよ、セーブしてやらなきゃな！」

（あゝあー……、このあとはコンビニのバイトかよ。このファミレスは一週間に一回給料だし、時給のバイトもやらずにちゃいけないわけだが、果たして、これが青春を謳歌する少年の生活か？）

「ギャハハ！ そりゃ言えてる、つつか先につつかかってくるアイツらがわりーんだろ」

「まあな」

「「ギャハハ！！」」

（いや違うよなあ……、なに二次元の世界に来てまで苦勞する人生をやっちゃってんだろ……、所詮は脇役だからかなあ）

「ああ？ レベルアップ 幻想御手について知りたいなあ？」

（いや、諦めるな！ 俺にも主人公属性なるものが備わっているはず！ 例えば、こう——）

「うん、ネットでお兄さんたちのことが載っててー、出来れば私にも教えて欲しいかなーって」

「……こう、メインキャラクターとの出会い、とか、さ………」

昌の目の前には、現在進行形である人物がいたりしたのである。

あの特徴的な制服、そして肩までかかっている髪。

そして、その人物だと断定、誰かをはっきりと知ると。

（あれ！？ こんなに軽い性格だったのか！？ こんなんで御坂は俺の嫁とか言っちゃってる奴いたの！？ いや、確かに美少女だけでも！！）

ぶっちゃけ、あの御坂美琴だった。

超電磁砲 二

本作の主人公である、木山昌は走っていた。
と、いうのも、あのあと御坂美琴はとんでもないぶりっ子（勘違い）だったこともあり、このままじゃ色々ややばいかなあと考え始めた昌は、スキンヘッドの大男が美琴に手を出そうとした瞬間のことで。

☆☆☆☆

ドカツ！ と蹴る音が辺りに響いた。
「っ！！？？」

スキンヘッドの大男は、急に蹴られたことも忘れ、ぼけー、と少年を見る。少年は、蹴ったあと冷たい目のままスキンヘッドの大男に言った。

「お客様、店内での暴力はお引き取りいただきたいのですが」

——ええええええええええ！？

店内にいた誰もがそう心の中で叫んだ！

「ちよ、はあ！？ いやえ……、て、てめえが暴力働いてんじゃねえか！！」

「これは正当防衛です、それよりこちらの女性にセクハラをしようとした、あなたを性暴力で訴えてもいいんですが」

「せ、セクハラなんて……」

「セクハラがわかりませんか？ セクシャルハラスメント、大まかにいえば女性の方が不快だと感じたらそれに該当しますが、すみませんね、バカには何言っても通じないというのに」

「こ、このやろう！ さっきから俺のことをバカにしゃがって!!」
速くも喧嘩に突入しそうな勢いだ。しかし、そんな一触即発のなかにまたトラブルの種がまかれる。

「まままま！ お二人も落ち着いて、ね？ ここは一つ穏便に」
「あん？」

目と目の火花が散る二人の間に、一人の少年が入り込んだ。
というか、昌にとってとてつもないほど懂れた主人公。
ツンツン頭の不幸少年。

「というか、コイツは元々こんな性格じゃねーし、騙されないうちに冷静になれよ、な？ 明日を黒焦げで真っ黒状態で過ごしたくはねえだろ？」

八割恐怖二割自尊心で、彼はまるで迷える子羊を導く神父のように語る。

しかし、怒りが先にピークに達してしまったスキンヘッドの大男は、そのツンツン頭の少年を掴みかかろうとする。

上条はそれを、咄嗟に体をひねることによって避ける。

「おわっ!? な、なにしゃがる！」

「何かたってんだゴラァ！ 調子こいてんじゃねえぞ！」
速くも第二戦目に突入しようとする二人。

ああ俺の出番はもぎ取られたあー、と妙に嬉しそうな笑顔でその場を眺める昌。

昌は戦闘狂だったりするわけじゃないのだ。大丈夫、多分。
そんなカオスな状況の中、椅子に座っていた男の一人が立ち上がる。

「こ、こいつらグルだな！^{タダ}無料で情報を手に入れようとしてたんだろ！」

何言ってんだ？ こいつ、と昌は既に戦前離脱と決め込み、定位

置から五歩ほど離れた場所で、頭の上にはてなを浮かべていた。

しかし、不幸な少年はそんなことを気にせず、速くも喧嘩腰へとモード移行。

（へ！ 今日の上条さんはちつとばかしテンションがハイなんだい！ 夏休みを目前とした学生の底力をみよ！）

「二、三人程度ならなんと——か……」

その少年が最後まで語る頃には、でよーがはははマジかよ、と多数の人数がトイレから現れていた。

必然、というか当然、上条に冷や汗に似た液体が体中から大量にブワッ！ と現れるのが、わかる。

「……トイレに集団でゾロゾロは女の子の特権だと思ってましたが——ッ！」

何だこのウニ頭喧嘩売ってんのゴラ、と既にバトルモード。

「たった一人で立ち向かうその度胸は褒めてやる」

約一〇人に睨まれる某不幸少年。スキンヘッドの大男はフフンと鼻を鳴らして、

「どうすんだ？ 今なら有り金全部渡して土下座して謝るんな、ら……」

しかし、最後まで言い終わる前にはもう目の前に上条の姿はいなかった。

「————ちょ、ハア！？ 自分から出てきたのに!？」

大多数は逃げた少年を追おうとする、が、スキンヘッドの大男だけは三、四人を従えて、昌の前に立つ。

「……まあアイツはあいづらに任せとけばいいし……なあ？ てめえとのケリがついてねえよな？」

「へ？」

あまりにも急な方向転換だったので、少々間拔けな声をあげてしまう。

ヤバい、なんか色々イヤバいことに巻き込まれそうだ、といち早く気付いた昌は、カウンターのちよつと奥で、こちらの様子を伺う

筋肉ムキムキ店長にアイコンタクトを送る。

救援を求める、昌のアイコンタクトに店長は――、

「（自分で後始末をしろ☆）」

最大の笑みで、彼の上司である店長は見放したのだった！

「え、ええと……」

喧嘩としても、多数での喧嘩など昌に自信はない。

もう一度周りを見る。

最大の笑みで見つめる店長、先ほどから辺りに紫電を撒き散らす少女、自業自得だと眺める店員と暴れるなら外にしてと、目で訴えかけるチーフ。

そしてさつきからガン見をずーと続ける、とても熱心な不良大男。

昌の思考は単純明快だ。

「お疲れ様でしたぁー！！」

「なっ、ゴルラァ！！ てめえも自分からしやしやり出た癖に逃げんのかァアあああああ！！」

なんとなく、なんとなく不良の大男に同情してしまう状況だったのは、明確であろう。

唯一残された、某電撃娘はというと……、

「……ねえ、黒子。そろそろ私の堪忍袋つてものがブチ切れちゃいそうなんだけど、良いのよね？」

超電磁砲 三

昌の幸運は、その某電撃娘が昌の走ってきたルートにギリギリ来なかったことだろう。

おかげで不良少年たちだけを相手にすることができる。

とりあえず、その場の環境を一人ずつで戦うしかないようにさせるため、細い裏路地に入る。

よっしゃさっさとかかってきやがれ！ と一人意気込む昌。

だが、一向に現れる様子はなかった。

まさかこれだけで皆ダウンしたなんてわけねーだろうな、と少々げんなりした様子で、こっそり裏路地から顔を出す。

……………真っ黒の塊があった。

「うへえ……、雷にうたれたやつってこうなのか……」

そおっと、その真っ黒の塊に近づいて、そこらに落ちていた木の枝でつつきながら呟く。

死んだわけじゃないが、見る限りはほとんど死にかけに見えたのは、昌の目が正しいのだろう。

立ち上がった昌の耳に、ゴロゴロ……と不吉な音が忍び寄る。

思わず、昌は音がする方に振り向いた。

そこには

「……な、なんかもくもくの雷雲がこちらに来てそうなんです、落ちねえよな……、雷」

思わず現実逃避してしまいそうな出来事の連続に、泣きたくなる昌は速くお家に帰りたいが、迫る雷雲を目にしたあとは、まるで足に釘が打たれてしまったように動けなかった。

そんな昌の背後、影から現れる人物が、一人。

「な、何をしておる！」

「え？」

その少女、普段は自分と同じ年の体格にすることにしていたらしいのだが、やはり焦っているせいだろう。本来の一〇歳ロリに戻っていた。

その一〇歳ロリ、木山息吹に手を引っ張られる形で、少しずつその場を離れる。

「アレはそのままじゃとこら付近に落ちるぞ！ お前様、まさか雷に打たれたいなどというマゾ体質全開じゃあるまいな！！」

「んなわけねえだろ！ お前こそどうなんだ一〇〇〇歳のババア！」

「儂は九九九歳じゃ！」

「どっちもほとんど同じじゃボケ！」

同じじゃないわーっ！ と夜の叫び合いが展開。

だが、それも次に現れる轟音の前には、なすすべなど毛ほどにもなかったのである。

☆☆☆☆

「昨日は散々だったな、ファミレスやらコンビニやら自宅やら、今も停電中だなんて……、まあどれも今日中に動くらしいけど」

家でゴロゴロ転がりながら、独り言を呟く今作の主人公である。

昌は自然と右手の包帯を眺める。生前、と言うのもおかしいが、元々の癖で何かしら右手に包帯を巻くのが日常になったらしい。

ここで、右手にまつわるエピソードを話しておこうと思う。

彼、木山昌にも元々幸せとも不幸せとも言えない、普通の家庭があった。

父は少し厳つい顔で、一日の大半はパソコンに向かつて、いわゆる働きマンだ。仕事の内容は知らない。一度父にそれを聞くと、実の息子にそんなこと聞いてどうする、という、至って『無駄』が嫌いな性格だった。

一度だけ、昌は父に褒めてもらいたく、テストで頑張って、一〇〇点満点をとったとき、心のどこかではそんなもの当然だ、とも言っていると覚悟していたところもある。だが、そんな期待と不安に満ちた結果は、奇しくもいい方向だった。

「よく、頑張ったな……昌」

優しく微笑む父に、昌は笑みを止められなかった。その時ほど、父親の手が温かいと感じたことはない。

母は、父と変わって息子に対する態度が少しだけ過保護だった。怪我をしたら、その怪我の具合でちよっぴり態度を変える。なんとなくおかしいと思う。

ちよっとしたかすり傷なら、唾でもつけてなさいと突っぱねるが、皮膚の皮が剥がれ、血が流れていると

「ちよっとそれどうしたの！ アナタ！ 今すぐ救急車に電話して！」

と、とにかく物凄い豹変だったのを、覚えていたりする。

とにもかくにも、木山家は三人家族。

そんな三人家族にも、突然の事故はあった。

簡潔に述べれば、放火である。

その日はいつも通り父は仕事。母はパートで午前はいなかった。両親が帰ってくる頃には、もう昌は病院で寝ていたという。

その時、右腕の半分が酷い火傷だったらしい。しかし、きちんとした応急措置もあったためか、整形の手術で上手くいけば元の色になるといわれ、両親は迷わず手術を許可した。

その名残とでもいうべきか、手術は一応成功、ただ継ぎ目というより、一部火傷の部分が治るのが遅れてしまい、それを隠すために昌は学校にいつも右腕包帯という異質な姿で通った。

唯一の救いといえば、それでトラウマなどができなかったことと、
今となっては火傷の部分がきれいさっぱり元に戻ったことだろう。

閑話休題。

「そーいや……包帯買ってなかったな」

唐突にそう呟いて、立ち上がる。

「おい息吹、出掛けるぞ」

「なんじゃお前様、ばいとの時間はちと早いんじゃないかなろうか？」

「ついでに買い物あるから、そこ寄って直行だからな。留守番する
なら別にいいけど」

返事を待たずに、昌は玄関に歩き出す。

それと同時に、身だしなみを整え始めた息吹。

「ほれ、速くいくぞ一〇〇〇歳の吸血鬼」

「僕は九九九歳じゃっ！」

超電磁砲 四

「見つけたわよアンタ！ よくも昨日は私に恥をかかせたわね！
ってちよつと、ねえ待ちなさいってば、え、あれ、もしもーし、聞
こえておらっしゃいませんか？ ……いいわ、こうなったら実力公使
よ！」

まるでどっかの不幸少年の不幸が移ったと思わせるような奇遇で、
昌のちよつと背後についてくる人物が。

と、突然目の前にいる警備ロボットが破裂した。理由はわかる、
なにかしらの電撃が当たったからだ。

あちゃー……これってどんぐらいの値段があるのだろう、と既に
現実逃避を始める少年、目からは頬を伝う涙。

もちろん、今作の主人公である。

「……なんでございましょうか、お客様」

「そのフリやめてくれないかしら！ あ、あのときは演技だったの
よ！」

左様でございますか、と呟いてしまっている昌は、既に逃げ腰で
隙があったらすぐさま立ち去ろうとしていた。

まだ寿命を減らしたくはないのだ。

「とうかなんでさっきから無視すんのよアンタ」

「死にたくないからです」

「は？」

「貴女の美貌に酷く心酔——ぶるえごおええええええええ！」

「吐くな！」

お茶の間に見せられない絵柄がここに——といたいところだが、
もちろん吐いたフリである。

最後まで言うとうちの自制心がどこまで耐えられるのか、自信が
なかったから。

つまり照れ隠し。

微妙に昌もツンデレ属性がありそうだった。

「……それで？ 用はなんですか？」

「なんでアンタそんなに他人行儀な言い方すんのよ」

他人だろーが！ と既に素の言動が喉元まで出てしまうが、ギリギリのラインで飲み込む。

美琴は俺の嫁！ の集団にまだ殺されたくないからである。

「アンタも物好きよね……、なに？ 戦闘狂だったりするわけ？」

「それだけはお前に言われたくねえよ！」

速くも前言撤回だった！

「は？ 私のどこが戦闘狂よ！」

「全部だよ！ お前初対面の相手に勝負よ勝負なんて立ち塞がっちゃうお前は見たまんま戦闘狂だろうが！ しかも大体の理由がどうせムカついたからだろ？ 最近の漫画にだってもっとマシな言い訳があるわ！！」

「はあ！？ あ、ああああああれは事故よ！ 事故事故！ 大体アンタにだって私にムカつくことしたんだから仕方ないわ！」

「ムカつく場面あったか！？ え、小説で言うならたった数行の文程度の会話にムカついてしまう短気野郎だったのかお前は！」

「たった一言でもムカつくことはできるわ！」

「なんの自慢にもなんねーよ！」

ゼーハーゼーハー、と息が荒くなる男女。決してエロの要素はないので、あしからず。

もういいわ……、とかなりげんなりした様子で、美琴は背筋をピンと伸ばす。

「とにかく、私と勝負しなさい！」

ビシィ！！ とそれはもう見事な動きと体勢で、昌は決闘を申し込まれたのだった。

ちなみに、影の中で主人を見守っているロリ吸血鬼は密やかな嫉妬に狂いつつ、この気持ちは何なのか、と面白い心情の葛藤があっ

たりしたが、ここでは割愛しておく。

☆☆☆☆

場所は変わって、どこぞの川辺。

ある場所では喧嘩の決闘場と呼ばれたり、ある場所では橋の下にはどっかの番長さんが可愛がっている子猫がいるとか何とか、とにかく色んな名前がつけられているところである。

強者の余裕とでも言うべきか、学園都市第三位の冠を有している彼女、超能力者（レベル5）、電撃姫。

御坂美琴。

彼女は余裕の笑みを浮かべながら、まるでどこかの門番のような仁王立ちで相手をにらんでいた。

もちろん、にらまれているのは今作の主人公である。

「ふん、今日がアンタの厄日よ!」

「命日だ馬鹿」

「命日よ!」

このさい、いい間違えた場面については触れないで頂きたい。

何事も触れるのがいいわけじゃないのだ。

「って、命日だと俺死んでねーか!? お前の言いたいことがわかったから修正したけどこれっていわゆる自爆ってやつだよな!？」

「そうね」

なんかつめてー! と驚愕に染まった表情を浮かべる。

ちなみに、今は昼食の時間よりちょっと前程度なので、そろそろ外に出てくる学生が増えてくるせいなのか、野次馬が少しずつ集まっていた。

どうも、というかやはりこの舞台は学生の中でも有名な場所らしく、野次馬のなから、今日はやってたなやら、あれ常盤台のお嬢様じゃねなどや、あそこの生徒可哀想と、そういった実況が昌の耳に入る。

俺は負ける前提なんですわかります、と心の中で涙を流していたが、いつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。

下手をすれば、ビリビリによって気絶そのまま病院に直行ルートが彼を待っているのだ。

彼は忘れない、右腕のため一時期入院をさせられたとき、ゲームみたいに美人看護婦に出会える！ と中二病なことを考えていたときから、真っ逆さまに落ちたときの絶望感を。

詳しく説明するならば、でっぷり太った看護婦と貞操の危機があった、とだけいえばもうわかるだろう。

トラウマだった。

昌にとって、思い出すのも憂鬱だった。

（負けは負けでも、刺し違えでもさせて、軽傷の傷で終わらせてみせる！）

脇役には脇役なりの流儀、という某無能力者の主人公の名言を、心の中で呟く昌。だが、それを本を読んでいない昌に理解させるのは無茶な話だろう。

さて、ここで二人の準備は整った。

勝敗など最初から決まっている、八百長試合が。

超電磁砲 五

この学園都市にて、第三位と喧嘩しようとする馬鹿がいた。
というか、今作の主人公だった。

彼は、いつでもすぐに動けるよう中腰になって、静かに相手にプレッシャーをかける。（実際にかかっているのかはさておいて）

一方、美琴のほうも一応は喧嘩慣れしてそうな昌を見極めの最中で、少しの間は待つことを考えおり、結果どちらにもらみあうだけの形になっていた。

さて、実はいうと昌には重要な、そして聞いた者にそんなことを聞かれたらお前は馬鹿かぁー！ と怒られること必須の事態になっていたのだ。それは――

（……はは、さあてこの都市に住んでいる能力者全員に問いますよー、能力の演算ってどうやんの？）

答えてくれる者などいない、というか馬鹿である。

自分の能力名、その効果を知っているのに、使い方を知らないという。例えるなら赤ん坊に拳銃を持たしているような、そんな状態だった。

なぜ、時間割り《カリキュラム》を受けていないのに、もう能力が開花しているのかについては、色々と話があるわけだが、簡潔に言うとなレイスターが昌が気絶している間に学習装置で能力自体はきちんと開花させ、“ここでの”一般高校一年生と同じ分の能力開発が行われていたのだ。

確かに能力自体は使える状態になっていたことはわかる。というか自分ではまだ一度も試したわけじゃないので、教えてもらった、というだけだが。

（俺は馬鹿かぁーっ！！　なに昨日とか青春語ってんだよ！　学生

の本文は勉強だろうが！　なに暇とか言ってたんだ俺！　やること大量にあったわ！」

ああもう昨日の俺をなぐってやりたい。
と鬱になる昌。

（思い出せ……、アレイスターはなんつってた……）

《君の能力は力場干渉という、その力の内容は——》

（AIM拡散力場を操る能力——！）

昌はニヤリと余裕を含んだ笑みを浮かべ、美琴を睨む。

「な、なによ？」

睨みつつ、そして——

——そして？

（無限ループありがとうございます）

がっくり……、と心の中で膝をつく昌だった。これに関しては自業自得だと思う。

「さあて、行くわよ！」

「へ？」

何がわからない内に、昌の中でとにかくにげろっ！　と言ったものが、直感がそう告げる。

昌は体を無理矢理右にダイブさせて、その場から離れる。

上手く想像するなら、野球でいう飛び込みみたいなものだ。

ボバァッ！　と、突如昌がいたところが爆発した。

至近距離で爆発が起こり、昌の体はその飛び込みの態勢のまま吹き飛ばされる。

「う、うわあああああああ！？」

不安定にバランスを崩した昌はそのまま地面を転がる。

（ゲホッ！　クソー上条さんの野郎……、あんな『見てから』対応するのなんて無理に決まってるじゃねーか！）

よくこんな攻撃で右手を動かしてたな！　ともはや既に怒り口調で、ぼやく。

それとは裏腹に、雷撃の槍を発した美琴は、強者の余裕、といえばいいのか、ゆっくり昌のほうに近づき、昌の姿を確認するとそれを素直に称賛する。

「へえ、よく避けたわね。一応褒めておくわ」

「……そう言わずにもっと褒めろよ、雷を避けたんだぜ」

両者は、二人はどちらも目が離せなかった。

美琴からして見れば、昌が何の能力者なのかが分からなく、下手な手出しが出来ない。

逆に昌からして見れば、美琴の一挙一動、仕草から癖まで、全てを注意して、雷撃を予知しなくてはならないからだ。

先にその均衡を破ったのは――

「うおりやアアアアああああ！！！」

大きな雄叫びとともに、雷撃の槍が昌目掛け飛ぶ！

それを寸前で横に飛び込み、直撃を避ける。が、それも先ほどと同じく爆発によって吹き飛ばされ、地面を転がる。

「今！」

美琴は地面に掌を向け、磁力操作によって砂鉄を集める。

そして、今まさに美琴に握られているのは、剣の形に納めた砂鉄である、と言っても、そのままの状態では碎けることのない鉄の錆びた剣と同程度で、簡単に言ったら鈍器である。

それを、形概念を無くして剣、というより鞭に近い形状にする、と、昌に向かってそれを放つ！

一方、飛び込みによってバランスを失っていた昌はそのしなる砂鉄の鞭を見て、チェックメイトだろうどう考えても！　と怒鳴り気

味に心の中で叫ぶ。

そして、目の前まで接近した砂鉄の鞭を見て――

――不意に、軌道が曲がった。

「え？」

「あれ？」

二人の時間が一瞬だけ止まった。

「……アンタ、磁力を操る能力だったの？」

「……ああ、えと、一応そうか、も？」

なにその曖昧な表現、とやや飽きられ顔をする美琴。

そんな受け答えをしつつ、昌は横に突き刺さっている砂鉄の鞭を見て、

（今、何か見えた（・・・）気が……）

「……御坂、もう一度それを俺に放ってくれないか？」

「ハア？ ……オッケー、今度は高速振動させてやってやるわ」

手元までそれは戻り、剣を作り出す。

ブーン、と何かが震える音が昌の耳に入った。例えるならハエが舞っているような音に近い。

と、木の葉が美琴の前に流れ、それが砂鉄の剣に触れるとすっぱり切れる様子を昌は見た。

「ちょ、おま！ それは流石に無しだろう！！」

「大丈夫よ、すこし切れる程度だから」

明らかに少ななんてレベルじゃないんですが！？ とエスカレートしていくテンション。

「くらないさい！」

ビュバツ！ と風をも斬るように、砂鉄の剣は鞭へと形を変えて昌に襲いかかる！

本来は砂鉄の鈍器でボコボコにしてから謝らせようと、考えていたわけだが、昌が『妙』な力を使ったために、ちょっとした危機感

を煽りつつ、実力を試そうとしていた。

自分が死ぬかもしれない、そんな一撃に対し人間は、本来の力を発揮することが多いのだ。

もちろん、こんな物騒なものを直接当てるつもりはない。当たるか当たらないかの瞬間に、きちんとコントロールして軌道を逸らすつもりである。

対して昌は、寸前まで一瞬も目を逸らさない。

そして、あと少しでぶつかろうとする砂鉄の鞭が、目前まで迫ったとき――

「今だ！」

右腕を勢いよく横に振るう！

それと同時に、目の前まで迫っていた砂鉄の鞭が直角に横に曲がった。

端から見れば、まるで昌が殴り飛ばしたような（・・・・・・・・・・）
・）、そんな光景に見えていた。

「なっ！ アンタ一体何したの！？」

勝手に横に吹っ飛ばされた自分の獲物を眺め、そしてあれはただの磁力操作じゃないと、そんな謎だらけの昌に恐怖を覚えた美琴は、思わず叫ぶ。

「何って……、無理矢理磁力で右の方向に曲げさせたただけだけど」

そんな馬鹿な、と美琴は思う。

仮にも超能力者（レベル5）、その圧倒的チカラの差がありながら同じ使い方で割り込まれたのだ。

それは、単純に言えば美琴以上の磁力操作が出来ることを指していた。

いくら美琴が力加減をしていたって、それでも同じ能力同士で負けるわけではないのだ。

「そんなワケ――あるわけない！」

ビリビリイ！ と辺りに紫電を撒き散らす。

「……どうやら、アンタもただの能力者じゃないみたいね」

「……だったらなんだよ」

いや別に、と美琴はそれをただニヤけて、

「加減がいらないうってんなら、本気でやるまでよ！」

突如、昌の目の前が光に包まれた。

昌は地面に手をつきつつ、立ち膝の状態で、周りに誘電させるように『演算』する。

ゴバア！ と周りの地面が抉られ、辺りが一瞬で焦土に変わった。
美琴の電撃の仕業だ。

（あつぶねえ……、AIM、たしか無意識やら無自覚とかそういう意味があったが、あのオーラみたいなの（……………）がそうなのか？）

AIM拡散力場、それは能力者が『無意識』に発する微弱な力。
今昌が行ったのは、美琴のAIM拡散力場から『自分だけの現実』
に干渉し、同じだけの演算能力を以て使った磁力操作だ。

昌にとって、難しく考えるより自分でそれを感じ、感覚をつかんで使うタイプらしく、それほど演算が難しいくない電気使い（エレクトロマスター）の能力は無事使えたこともある。

ただ欠陥が一つ。

それは相手の自分だけの現実を『忠実』に表してしまうことだ。
パーソナルリアリティー

AIM拡散力場を介して、相手の自分だけの現実を借りて放つため、その使い方だとそのレベルの効果や、使用方法でしか使いこなせないのだ。

例えるなら、大能力者（レベル4）の精神感応だと、それ相応のチカラでしか発揮出来なく、また受信相手の心を操ることにしか使用できない場合はそれしか出来ず、辺りの人間に精神感応で音を伝えるならばそれしか出来ない。それも超能力者（レベル5）並みのチカラなどというのはもってのほか。

そもそも、まだ開発を十分に受けていなく、演算能力も一般人並

みである彼がどんなチカラを有してであろうと、そのままじゃ宝の持ち腐れだ。

その宝の持ち腐れの状態である彼には、まだきちんとした能力者とは呼べないのである。

だがしかし、こうやって自然の環境で自己の能力に目覚め始める姿を見るには、天才の素質はあるのかもしれない。

いずれにしても、この状況は彼に能力を教えたアレイスターによって弄ばれていると考えたほうがいいのだろう。

もつとも、そんなことは露とも考えない今作の主人公にも非はあるだろうが。

電撃によって発せられた爆発による風が、電撃自体は防いだ昌に襲いかかり、体の自由が奪われた。

「ぐっ！ 煙で前が――」

だが、そこまでだ。

昌の目の前に、いきなり美琴が現れたことによって勝敗が決する。

「……私の、勝ちね」

「……そして俺の負けだな」

観衆はみんな頭の上にはてなマークを浮かべる。

観衆からは、どう見たって握手をしあう姿にしか見えないからだ。「ここで俺が何かをしようとすれば直接体に電流をぶちこむって寸法、正直言って恐れいるよ……」

「それでも反撃しようとしたアンタも流石よ」

あの一瞬で起きたことを説明すると、いきなり現れた美琴に対して、昌は右拳をつくって下から上に突き上げるアッパーを放ち、それを美琴はギリギリ避け、隙があったところで昌の左手を強引に掴んだのだ。

どちらも、砂煙で相手の姿をまともに見えない状態での戦闘にしては、評価を与えてもいらいである。

「にしても驚いたわ、砂鉄の鞭を強引に吹き飛ばしたときなんか特に」

「それを言ったらお前、あんな砂煙の中で俺の居場所をすぐに割り出したことのほうが、俺は驚きだよ」

「ああ言ってなかったっけ？ 私の場合周りソナーがついてるみたいに、目を使わなくても気配は感じんのよ」

なるほどねえ、と既に戦闘を終えたあとのためか、あれだけ逃げた相手にも少しだけ心を開く昌だった。（戦闘狂だという意識は余計増したが）

喧嘩も終わってしまったためか、少しずつその野次馬も減っていく。中には、すごい！俺レベル5の戦いみちやったよ！いやいや、あの第三位にここまでの善戦を繰り広げたあの少年も評価するべきでは、美琴様ー！と色々な意見が混じってしまっている。

「さて、とりあえずこれでいいだろ？俺はこれからバイトがあるんだ」

「な、じゃあどうして最初に言わないのよ！ちゃんと用事があるなら先に言いなさいよね！」

グハッ！ ツンデレパネェ！と心で叫ぶ悪魔を抑え、昌はズボンに付いた砂を払う。

「……よし、んじゃあ時間も迫ってるし急ぐな。また今度な、つっても戦い合うのは御免だけだな！」

「あ、ちよっと！待ちなさいってばあ！」
走る走る。

既に予定の時間から十分過ぎているので、昌はもう走りながら怒られる準備をしなくてはいけないのだ。

超電磁砲（前書き）

これから一つの区切りとともにこうやって前書きかあとがきか、やっていきたいと思います。

うん、なんか話す内容が……

じゃあなんでそんな面倒なことするんだよ、と思われる方が多いと思いますが、単に一定期間を空けて突然前書きかあとがきに書くのはバランスが悪いなあと思った結果です。

それともう一つ、小説（本）では前書きあとがき必ず書いているので、自分もやってみよう！ と思ったからです、ええ突然の思いつきじゃありませんよ？ 信じて下さい

超電磁砲

今日の俺は総じて運が悪すぎる……、と心の中でぼやいてしまっている彼は、木山昌。言わずと知れた、今作の主人公である。

そんな彼の前には、とある五人組が居座っていた。

黒髪ロングの少女、頭に花飾り（飾りなのか？）をつけている風紀委員^{ヤッジメント}。ツインテールのこれまた風紀委員^{ジャッジメント}。目の下隅の研究者っぽい女性、それと――

「なにやってんのよアンタ、ほれ私が勝ったんだから一つくらい奢りなさいよ」

「なんでお前が俺の仕事先にいるんだ!？」

ちよつと数時間前に命をかけた喧嘩を繰り広げた相手がそこにはいた。

というか御坂美琴だった。

あのツンデレ姫と呼ばれ、ファンが数知れないほどたくさんいる、超能力者（レベル5）。

どうして昌と美琴はまたしても出会ってしまったのかは、美琴はツインテールの少女、白井黒子がとりあえず涼しい場所でお話したいと言い、大事な件に関しての話題が彼女たちであり、昌はというと、お店に遅れてくるとはいいい度胸してるじゃないかハッハッハ、と笑顔で、しかし目が笑っていない用心棒の店長にこっそりしつぽり説教され、お店の玄関掃除の上に閉店時間まで働かされるハメになっていた。

「昼間からお熱いデート（命をかけた喧嘩）に巻き込まれたり、
いらない説教をくどくど説教されたりとまあ……、面倒というより
ツイてねえなあったく」

「とりあえず、涼しい場所でお話ししましょう」

「そうね……って」

「つうか、何でアイツあんなに戦い大好き娘なんだ……アクション
ゲームでもやってりやいいのに……って」

双方、目を合わせて、沈黙。

……………。

「「あああああああああ！！」」

二人とも半歩下がって、指を指す。

「ななな、なんでアンタがここにいのよ！」

「お前こそなんでこんなとききてんだよ！」

うっさいわね！ 私にも用事ってモンがあんのよ！ と怒鳴る美
琴。

「大体、なんでアンタあるときすぐ行っちゃうわけ？ 普通メアド
でも交換くらいするでしょ！？」

「しねーよ！ 最近のガキはませすぎてんだよ！ つかあんとき
俺急いでるつったよなあ！？ なんだ、お前は俺の食料費やら生活
費なんか使わないで公園で段ボール生活でも送ってろとでもいいて
えのか！！！」

「……アンタ、そんなにお金ないの？」

「……明日から生きていけるのか心配なくらいに、ね」

静かに、静かに昌の肩に手を置く美琴。そこから察するに、頑張
れ若人……諦めずに生きろよ？ といった感情が込められていた。

ああ貴女が女神か！

というわけで今晚のご飯から給料日まで美琴様に奢ってもらう

ようにはなったのだが、

「あ、でも喧嘩では私に負けたんだから、なんか困ったときは遠慮なく命令させてもらうからね」

前言撤回。

やはりこいつは魔性の女だ、とこれまた静かに、心の中でひっそり呟く昌だったのだった。

そんな会話の中、横にいる黒子と研究者の女性は汗だくになっており、会話に終わりが見えた頃を見計らって黒子が話しかける。

「あのー、お姉さま？ そちらの方は？」

それに答えたのは美琴ではなく、昌だった。

「ん、ああ……俺の名前は昌、木山昌つつうんだ」

「あら、そうでしたの？ わたくしは白井黒子と申します」

「はあ……こりゃまたご丁寧に」

御坂とは対称的なお嬢様だ、と愚痴る昌、少々根に持つタイプらしい。それと何度でも言うが、今作の主人公である。そんな主人公があったっていいじゃないか

そこで、店の中から昌を呼び出す声が。

「おーい昌君、掃除はいいからお店の手伝いしろって店長さんが……」

「ん、了解。つうわけだ、またな」

そこで、話は一番最初に戻る。

お金がないことを承知で昌に奢って貰おうとする美琴、また私の話を聞かないで戻った罰よ、と目は語る。

それが癪にさわった昌は

「……ご注文になりました、いちごパフェ特大サイズとアイスコーヒー、それとミルクティーでございます。ではごゆっくりと」

「ちよっと待ちなさい」

がっしりと昌の仕事服の袖を掴む美琴。

「お客様？ 当店にはぶりっ子属性はいませんが……」

「だからそのフリやめなさいよ！」

ビリビリ!! と少しずつ辺りに撒き散らされる、危険。
カウンターの奥にいる店長さんと、アイコンタクト。

(店長、こんな時こそ筋肉の見せどころじゃないですか! さあ逝
っちゃってください!)

(自分で落とし前つけよう☆)

だからその星が飛んでいるような笑顔がムカつくんじゃないコル
ー!

とは言えず、

ただわかりました……、とだけ伝える昌。なぜか、彼の背中が小
さく見えたのは見間違いないだろう。

「ハア……んでなんかあったのかよ、悪いけどなんかの事件の会議
中つつうなら、俺を巻き込むのはお門違いってやつじゃ——」

「黒子、コイツにも幻想御手のこと教えてやって」
レベルアップ

「うおおい! 人の話はきちんと最後まで聞きやがれ!」

苦勞する人間だ、昌は。

だがこれには反対する黒子。

「お姉さま、悪いですが一般人の参加はどうか……」

「大丈夫よ、なんたってこの私に善戦を繰り広げた猛者よ。見込み
あるし、私の奴隷と言っても過言じゃないわ」

いや過言であってほしいです。と切に願う、生憎、その願いは一
生叶わないだろうが。

しかし黒子は、その『奴隷』という言葉にひっかかり、

「なっ、お姉さまの……奴隷? ………………こんの類人猿がアア

アアアああああああ!!」

なにやら、恐ろしい形相で睨み始める黒子!!

「お姉さまの奴隷はこのわたくし、白井黒子だけですの!」

「いや何くちばしってんのコイツ!？」

勢いはここでも止まらなかった、と言いたかったが

「何アンタ変なことってんのよー!」

雷撃にて、一蹴。

黒子の復活までにはまだ時間がかかるようだ。

黒髪ロングの少女は、美琴の話を聞いてふと昌を眺める。

「へえー、昌さん美琴さんと戦ったんですか！ 凄いですね！」

「へ？」

「申し遅れました！ アタシ佐天涙子って言います！ よろしくお願ひしますね」

「あ、ああよろしく……」

この子は活発そうだなーと苦笑する。

次に、花飾りをつける少女に目を向ける。少女は、その視線に氣付いていつの間にか半分以上まで減っていた特大いちごパフェを横にやって

「私は初春って言います、えと……下の名前は飾利って言います！ よろしくお願ひします」

「ああ、こちらこそよろしく」

この子はとても謙虚そうな性格そうだな、と感じる昌、なんとなくその甘ったるい声が頭に響いていたが、あまり気にしない。

次に目の下に隅をつくっている女性に目を向ける。

「……私の名前は木山春生と言う、よろしくな」

「よろしくお願ひします、名字が同じなんです」

春生はただの偶然だよ、とだけ言う。彼女も少々不器用な女性そうだと、なんとなく思わせられた昌であるが、すぐにそんな思考を止めて、美琴に向き直る。

「で、結局その幻想御手^{レベルアップ}てのはなんだよ」

「あれ、アンタにまだ話してなかったっけ？」

「話そうとした黒子に電撃放って氣絶させたのはどこのどいつだったかあ？ なあ御坂」

ええそうね、と目を逸らす美琴、一応罪悪感（黒子に対してではない）は感じているのか、昌のほうに向くと話の概要を話した。

「まず、その幻想御手^{レベルアップ}つてのは、能力者のレベルを上げることができらしくて、それでそれを使つての犯罪も増えているんだけど、その幻想御手^{レベルアップ}を使用していた学生が次々と不明の気絶を起こして、目を覚まさなくなっているの」

ふうん、と頷く。細かい話はよくわからなかったが、大まかな流れを理解した昌は、でも、と口を開き。

「それって自業自得じゃあねえの？ 能力だなんて所詮副産物だろうが。スプーン曲げがやりたいんなら力づくで曲げればいいし火が欲しいならライター使えばいいだけの話だろ？」

「……昌さんって、前向きなんですね」

「そうでもねえよ、つつかちよつと前には能力者狩りだの無能力者狩りだの、くだらない抗争があつたみたいだけど、何がしたくてやっていることやら……」

佐天の言葉を否定し、昌はなんとなく、能力者と無能力者の争いがあつたことを口にした。

昌から想像するに、ここでは無能力者（レベル0）は劣等感を、能力者は慢心を抱き過ぎている気がした。人間、確かにそういうことを感じるのは当たり前なのだろうが、やはりそこまで気にする必要はないだろう。

「だってさ、この六割が無能力者なんだ。能力を使えることを誇りには思つても、傲りにしちまったらそれはただの——」

——醜い人間だ。

その言葉に、約三名の少女が少しだけ俯いた。

「あ、いや、別にお前らのことといったわけじゃありませんのことよ？ ほほらほら、さあ会議です会議会議！」

昌なりには、なんかフォローしたつもりなのだろうが、やはりそんなことを感じられない言い方なわけで、それから三十分はそんな暗い雰囲気だったと言う。

「……で、結局何すればいいわけ？」

「昌さんは特に何もなくてよろしいのです、そもそも佐天さんとお姉さまも巻き込ませたくはありませんし、なにより一般人ですから」

黒子のその答えに、昌は若干喜びながらそうか、と言う。

「嬉しそうですね、アンタ」

「ああ！　だって俺は何もなくていいんだろ？　これが喜ばずにいられるかってんだ！」

「ふーん……」

「さて、それじゃあそろそろ帰らせてもらうかしら」

「そ、そうですね……」

初春と佐天はうんうんと首を高速に動かして頷く。

こうして、あの五人組はお店から立ち去った。

木山昌？　だれそれおいしいの？　とでも言うように、そこら辺に転がっている真っ黒な物体が妙に哀愁を漂わせていたのは、誰もが感じた感想だと信じたのだった。

超電磁砲（後書き）

ここまで読んで下さった読者の皆様、ありがとうございます。ここまで続けて更新しているのも、皆様のアクセス数、感想、評価があつてのことだと思っています。というか絶対そうです。

さて、ここまで連続で更新できたわけですが、龍輝はちよいとテンションがダウンしています。

実はおととい、遂に二〇〇ポイントいったぜえ！　読んでいる人皆にどんどん更新しよう！　と思っていたわけですが、昨日見ると

一九八ポイント

……ゴシゴシ

チラッ？

一九八ポイント

……ズーン。

となっていたわけで、期待していたそばから絶望に落ちた時の気持ちがよくわかりますコレ。

たった二ポイントの差はでかかった。

さてこんな誰特？　な会話は置いて

立ち位置が少しずつ確立していくと共に、何となく『浜面的やや上条さん』のキャラになりつつあるようですが、果たしてこれはいいいんでしょうか？

というか美琴を中心に書いてしまったために息吹の出番が全くなかった！　これは事件です！　あれです、完璧にインデックスの立ち位置に居座りかけてます。

その内息吹から『“い”なんとかさん』とか呼ばれそうです。くっ、そんなところに居座りさせるわけにはっ！

どうでもいいですが吸血鬼ってなんか妙に良い属性ですよ、噛

まれたくはありませんが……

さて、こちら辺でペンを置かせてもらいます。

感想、批判、意見、苦情^えなどとしどしお待ちします!!

幻想殺し 一

黒焦げはもう勘弁ですはい、と、反省していたりする今作の主人公。

しかし、それと同時に嬉しい誤算もあった。

直接あの電撃を浴びたせいなのか、それともあの戦闘によってなのかは、わからないが、今、木山昌という一人の人間が、きちんと実感して能力を使っていたのである。

「は、はは、ははは……やったぞ、ついに俺は能力を使えたんだ！」
バイトの帰り道、無邪気に喜んじゃう馬鹿な人間がそこにいた。
というかうちの主人公だった。

しかし、使えた、というより借りていたと言ったほうが正しいの
だろう。

なんせ、自分の演算などリモコンで操作するぐらいしか働いておらず、実質その能力を超能力者（レベル5）並みのチカラを持って
いる頭脳、演算、『自分だけの現実』パーソナルリアリティーを借りているだけなのだから。
しかし、そんな深いことを考えないのが昌なのだ。そもそもそんな理屈を深く考えることが無駄で

——面倒だ。

彼が借りたのは電気を操る能力。

学園都市の裏で密やかに笑む、『彼』の姿が目に見えかぶのは、果たして、いるのだろうか？

☆☆☆☆

喜び過ぎていて、とうに日が暮れていた、と実感したのは、それから二時間後だった。

（ヤベー、今日先生んちで焼き肉する予定だったのに、なにやってたんだ俺！）

すでに時刻は八時、やや十分くらいあとなのだが、まだ食べていないことを信じて走る、走る。

ちなみに、いつもは影に潜んでいる某ロリ吸血鬼も「構っておれん、好きに叫んでろ」と冷たいお言葉を残して、一人颯爽と帰ってしまった。

待っててくれ俺の肉ー！ と余計なところに力を注ぐ、主人公の気が知れないのだった。

得てして、やっとボロアパートに着く。何事も、ある程度無茶しても大丈夫らしく、なんとか二十分までには帰ってこれた。

余談だが、本来ならば今日は閉店まで働かされる予定だったが、電撃ビリビリ&キッチンと働くのコンビで、今回のペナルティーは軽減されたのである。

店長さんと熱いドラマがそこにあったが、誰も暑苦しい話など聞きたくないので、割愛する。

息を少しだけ荒くしながら階段を昇り――

――何かがいた。

どこぞで見たツンツン頭の某不幸少年と、白いシスターさんだった。

所々に金色の刺繍が施してあって、成金趣味のティーカップみたいななど、昌は感想を持ったのだが、まさかこの感想が目の前にいる少年と同じことを感じていたなんてのは、気付かないだろう。

と、突如ツンツン頭の少年がドアを蹴った。

（うっわ、アレいてーわ……）

ボソっと言って、昌は階段をまた昇り出す。

コソコソするのは性に合わないのだ。

「……っッ！」

痛がる少年、上条当麻に近づく。

「よく見てみれば、ファミレスにいた勇気ある学生さんじゃないですか」

背中に背負っているインデックスをうまく抱えながら、そして蹴った足を必死にさすりながら、上条は横にいる人物を見た。

「？　ビリビリと一緒にいたやつか、わりーけど今立て込んでんだ」「なにそんなに焦ってんだよ、ええと……そのシスターさん眠ってんのか？」

笑いながら、インデックスを見やる昌。ふと、そこで垂れる水みtainなものが見えた。

赤い、赤い液体が。

「ッ！！??？」

一瞬で昌は顔をひきつらされた。

「……オイ、コイツはどういうことだ」

お前はこの物語の主人公だろうが、と上条を見据える。

その主人公が、ヒロインを傷付かせてどうするとしても言うような、戸惑いといく宛のない怒りが宿った目を。

「話はあとでしますから、もう少しだけ待ってください」

『はいはいはーい、新聞屋さん用にドアだけ頑丈なんですー、今開けますよー?』

そんなまったりした様子で、恐らく焼き肉中である小萌の声が二人の耳に入っていた。

ガチャ、と無駄に硬いドアが開かれる。

緑のぶかぶかパジャマに身を包む、その先生は上条のことを見ると「新しいバイトですかー?」と言った。

インデックスの傷は、どうやら見えなかったようだ。

「あ、木山ちゃん遅いのです！　もう八時半なのですよ!」

「あ、あーわりい先生、ちよいとお仕事に、ね」

そう告げると共に、上条はハイごめんよー、と家主に全く気にか
けずに足を踏み入れる。

それに対し、本来の家主である小萌は必死に止めようとしていた。
「ち、ちょ！ 上条ちゃん急にあがれたりすると困るのです！
い、いや、その部屋がすごいことになってるってことはもう全然な
いのですよ？ ビールの空き缶が散らばっていたり煙草の吸殻が灰
皿に山盛りになってるとか、お菓子の袋が大量に捨てていたりなん
てことは！」

「先生」

声をかけたのは、上条ではなく昌だった。

「そんなギャグ通用しませんし、なによりこの人の背負っているや
つを見てください」

「ギャグじゃありません！ ってきゃああああああ！ ちちちち
ち血！」

インデックスの傷をきちんと認識すると、壊れたラジカセみたい
に、血という言葉を連呼し、パニックを起こす。

そして急いで畳の上にインデックスを寝かそうと、部屋に入るた
めの障子を開け――

「ギャグじゃなかったのか！？」

上条が驚きとともにそう言った。

ついでに言うと、昌も目を見張った。お隣さんはこんなに汚いの
かとか、すでに焼き肉はおわったとか、そんなことではなく、先日
貯め買いたしたポテチの袋の山がそこにあるのを。

（あの野郎……、ブチ殺す）

密かに怒りに身を震わしつつ、今はそんなことを考えている場面
じゃないと思考をリセットさせ、転がってるゴミを足でどかす。

「オイ、とりあえずソイツ寝かせろ」

「あ、ああ」

ゴミをどかした畳の上に、インデックスをうつ伏せに寝かせる。

それと同時に、汗にまみれたインデックスの目が自然と開かれる。
「――出血に伴い、血液中に^{マナ}ある生命力が流出しつつあります」

一瞬、その場にいる誰もが背筋に電気が走ったようにビクンと反応した。

ちよつとした恐怖と、不安。

その一言一言にまるで力があるように、冷たい単語を並べる。

「――警告、第二章第六節、出血による^{マナ}生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に『自動書記』^{ヨハネのペン}で目覚めます。……現状を維持すれば、およそ十五分後に私の体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これから私の行う指示に従って、適切な処置を施していたければ幸いです」

昌の背中に寒気が襲う。

まるで、この言葉を、声を、単語を聞くのが耐えないと、告げているかのように、嫌悪感をあぶり出す。

冷たい、口撃^{いちげき}。

上条は一回その状態を見ているので、少なくとも昌と小萌よりは動揺しない。

「先生」

「は、はい！」

「俺、救急車呼んできますから、こいつの側に居てやってください。この子見た目通り宗教やってるんで、よろしくお願いします」

上条はインデックスをみやって、

「なあ、インデックス……なんか、俺にできることって――」

「――ありません」

インデックスは冷たい単語で釘をさす。

いくら動揺していない上条にも、これには硬直してしまった。
繋げるように、冷たい単語を並べる。

「この場における最良の選択肢は――」

――あなたがここから立ち去ることです。

透明で、透き通りすぎて冷たいと錯覚してしまう、真っ直ぐな言葉に、上条はただただ、拳を握るしかなかった。

「じゃあ、先生、俺救急車呼んできますんで、公衆電話の所行ってきますね」

誰の言葉も待たず、上条はその場から立ち去った。

まるでこんな地獄は御免だとしても言いたいように、自分は何にも出来ない、邪魔者とでも告げるような。

そんな、そんな背中だった。

☆☆☆☆

場所は変わり、アパートに一番近い（と言っても、一キロ程度の距離はある）公園の、ブランコに座っていた。

「で、なんであんなことが起きたんだ？」

躊躇せず、躊躇わず、昌は聞く。

聞いてみれば、上条の物語は今日の今朝からだった。

何気なく、ベランダに布団を干そうとしたところに彼女、インデックスがぶら下がっており、一時的にそこに留まっていたのだが、なんでも上条の部屋から去るとき、フードを落としたらしく、インデックスはまた上条の部屋へ訪れたらしい。

“マジュツシ”は、簡単にいえばインデックスをサーチして追いかけているため、上条にもしもの場合を考慮して、インデックスは戻ったのだ。

一般人を、恩人を、巻き込ませないように。

そして――

「お前が戻るときにはあの状態ってか……」

「ああ」

ハア……、と昌は溜め息をついて上条を見据える。

「……だとよ、ちよいと力をかけてやれねーか」

息吹。

上条が瞬きをしたときにはもう、昌の背後にそれはいた。

「難しい相談じゃのう……、なにせ魔術師が関わっているときた。相手の使う魔術によっては封印される恐れもある」

「封印？」と昌は首をかしげた。

「そうじゃ、確かに儂は殺すことが出来ない、生態系の中で恐らく頂点に立つ吸血鬼の中の吸血鬼じゃが、未来永劫、永久に、永遠に封じる魔術なんてものもあるのじゃよ」

儂みたいな規格外の化物にはうってつけの方法じゃろうて、かつかつか、と笑いながら話す。

死に場所を求めているても、永遠に苦しめられる封印は血の気がなくなるほど嫌なのだろう。

だから彼女は封じられるという選択肢はない。
死ぬか生きるか。

ふーん、と昌はとりあえず相づちをうつ。

「……、誰だソイツ？」

「ああ儂か？」

上条の問いに答えたのは、昌ではなく息吹だった。

「なに、儂はただの……吸血鬼もどきじゃよ」

☆☆☆☆

「とりあえず、明日インデックスん所来いよ。明日なら俺仕事休みだし、やるだけ手助けしてやる」

「一つだけ聞いていいか？」

なんだ？ と昌は答えつつ、帰路を歩む。

「巻き込んでしまって、良かった……のか？」

上条は後悔していたのかもしれない。

ある程度、それも目を合わせた同士程度の関係である昌に、こんな危険な目に付き合わせてしまっていると、思ったから。

多分、というか実際そうなのだろうが、上条はまるで、懺悔をする子羊と同じ要領で、それでいて昌の話術に若干のせられ、話してしまった。

話した程度なら、まだ引き返せる。

これは、上条の後悔であり、昌の覚悟を問う質問。

昌はわざわざ足を止めて、振り向く。

「良かったに決まってるさ、人が死ぬバッドエンドなんて、つまりなくて面倒だからな」

何を当たり前のことを、とでも言うように、そう言って昌はまた歩みだす。

今日の昌は、いつもより饒舌で、かつこよく見えたのは、きっとポテチの恨みを早く晴らしたいからなのだろう。

その後、爺臭いそれでいて可愛らしい声色の悲鳴が、学園都市に響いた。

幻想殺し 二

「なあ息吹」

「なんじやお前さま」

帰り道、二人はあることについて話す。

「マジユツって、あれか？　なんかマジックポイントとか生命力を使って火の玉を飛ばしたりとかする」

「いや、確かに魔力を使用するにはするが、大体神話や霊装を操って使うことが多いのう」

「代表的なのは？」

「ルーン魔術じゃな」

紙にルーン文字を描いて、かつ決められた位置に貼る、大体の魔術師が使うことが出来る魔術（手品）。

「じゃああのシスターさんの傷は？」

「あれはただの刀傷じゃな、特に怪しいものはなかったのう
どうということだろう、と昌は思った。

上条から聞いた話では、そのマジユツシは火の巨人を操る、炎の魔法使い。

まさか、そんな切り札があるにも関わらず、更に剣術にでさえ身に付けているのなら、一般^{かみじょう}人相手に炎の魔術、切り札を出すわけがない。

上条がイレギュラーだと理解するには、明らかに相手にとって情報が少ない。

戦闘中にも剣術の類いが使用されなかったことを考慮すれば
「敵が複数いるわけか」

なるほどねえ、はっはっはと笑いそうになる昌。

明らかにテンションがおかしかった。

それもそのはず。

なぜなら、

カッン、と、ブーツが地面に当たる音が、静かにその場にいる生き物たちの耳に入る。

といっても、人はいない。

いるのは人間モドキと吸血鬼モドキ。

互いが存在を消しあって、存在する、関係する、そんな二人組のみ。

いや、音を出す犯人も合わせれば三人組なのだろう。

「……それで、殺るのかい？ マジユツシさんとやら」

なるべくプレッシャーをかけながら、そう振り返りつつ告げる。例の如く本当にプレッシャーがかかっているのかは、わからないが。

「私は人を殺めません」

左右対称、ニメートルほどの棒、太ももからばっさりと切られているジーンズ、なかなかどうして、世の中の女性からみれば羨ましいボディラインを誇り、尚且つ雰囲気もある。

エロイという雰囲気、ではない。

いや、確かにそれもあるのだが、今は前提に『殺す気』がない殺気が、彼女には立ち込めてあった。

と言っても、昌はどこぞの達人様ではない。本当に感覚だけで、ただ単にそう感じただけ。

私は、と矛盾を持つ、それでいて迷いを持つその女性は、告げる。

「忠告と、警告を示唆するために来ました」

忠告と警告。

彼女はそう言った。

「……俺よかアイツに言ったほうが多分タメになると思うけど」

「一般人が、これ以上私たちの問題に関わるなという意味です」

上条当麻^{アイツ}なんか、後でどうにでもなる、今はまだ関わりの少ない

人物から遠ざける。

そう言いたいのだろう、と昌は思う。

実際、今の昌の立場は少し不安定だ。例えるなら、事件には関わりを持たないが、関わりをもつ人と関わりをもつ、言わば相談相手とか、友達のそのまた友達のような微妙な関係。

「面倒事はまあ、確かに大が付くほど嫌いなんだけど」

「でしたら――」

「ダメ」

女性の言葉を、切る。

「ダメだなあ、『敵』に語るなら」

「力から、じゃのう」

今日は珍しく、息吹の出番が多い。というより、そのまま放置していたら一ヶ月は影から出ない彼女なのだが、如何せん場所が場所ならぬ出番が出番。

出ないことには始まらない。

「……立ち向かってきてもいいですが、無駄です。私が『魔法名』を告げる前に降伏してほしいのですが」

「だから言ったろ？ 力で脅されない限り、俺らは引く気はねえって」

そうですか、とその女性は刀に手をかける。

よく見れば、それはニメートルほどの長さを誇る、長い刀だった。もしくは刀というより、棒に近い、だからだろう、先ほど刀を棒だと思ったのは。

あんなに長くては鞘から抜くことも出来ないだろうに、と昌は呟く。

「（しかし……、コイツも原作のキャラなのだろうか。クッソ、マジで本読んどきゃよかった）」

心の中で愚痴りつつ、昌も体勢を整える。

あのときとは全く違う感覚。

相手は同じ女性で、同じように自分より強くて、手加減されるこ

とも同じ。

ただ違うのは、喧嘩か殺し合いか、それだけ。

「神裂です」

「……昌だ」

「木山息吹」

吸血鬼と特別な人間の戦いに、火蓋がきって落とされた。

☆☆☆☆

「はアアアあああああ!!」

昌は駆ける！ 走る！

手札の中身を知らない相手に突撃は無謀だが、昌は考えない。

無謀であろうと、自分の出来ることは近接格闘のみだからである。

そう考え、自分の持てるだけの力を振り絞って、地面を蹴り

直後、昌に烈風が襲った。

駆けようと、振りだした三步目の足が自然と止まる。

それと同時に、前に出した体重も強烈な風に押し返されてしまう。

(な、にが……)

思わず烈風が巻き起こったであろう、足元をチラリとみる。

そこには、複数の切り傷。刀傷が付いてあった。

あの一瞬、あの一コンマの間に、彼女は複数の攻撃を行ったのだ。

その攻撃には、後方で気をうかがう息吹も流石に目を見開く。

「(お前さま、流石に今のままじゃ勝つことはおろか、逃げることも出来ぬ)」

じゃあと、昌はその言葉に頷きを返し、息吹の位置まで戻る。
そして、すぐさま昌は息吹の肩に手をやった。

（一体、何を……？）

神裂が、そう思っている内に、新たな行動が起こされる。

接吻。

口づけ。

「なっ!？」

驚きとともに、神裂は固まった。サナギの如く、あるいは石像化してしまったように硬直した。

「ぷはぁ! おおお前様! もういいじゃろう!!」

羞恥、恥じらいの表情、簡単に言えば真っ赤に染まっている顔の
息吹。

人前で接吻は、一〇〇〇年生きている吸血鬼にも熱いようだ。

「……………」

「ど、どうしたのじゃ？」

「いや……、よくよく考えりゃ、俺のファーストキスってロリ顔の
ババアかと思うと、なんか泣けてきた」

「ババア言うな! これでも需要はあるんじゃない!」

「どういうお方に？」

「言わせるなっ!」

冗談、冗談ですよー? とやや弱腰になる主従でいうご主人様。

いつどの時代でも、男は女にひれ伏す存在なのか。

しかし、そんな漫才もすぐやめる。

「で、息吹。アイツをどう料理するんだい？」

「そうじゃのう、背中の肉を抉って、大将の首に刃を向けることも
また一興じゃろうて」

神裂は、その言葉にゾッと背筋が凍るような感覚とともに、落胆した。いや、実力の差がわからない相手というに、呆れたと言っても過言ではない。

たかが二人組――

「考え事は家でしてやがれ！」

——されど二人組

まさか、しかし、だが、そんな言葉というより単語の羅列が神裂の頭に浮かんだ。

『特別』な人間が普通の人間に遅れをとるはずがない。

あるとすれば、

（これが、超能力というやつですか！）

昌は神裂の懷に潜り込む！

圧倒的スピードとまでは言えないが、それでも十分速い。それ故に先ほどまでのコミカルな雰囲気が消え去る。

だがしかし、『特別』な人間にはむしろ丁度良い相手、いや遅いくらいだ。

昌の振った拳を、その長い刀で防ぐのではなく、腕で軌道をずらす。

バランスを失った昌を畳み掛けるように、その背中に刀、七天天七刀で殴打する。

「ガハア！」

そのまま、昌はコンクリートの地面を転がる。

だが神裂は休めない。

自分の身長半分やや大きい息吹による、猛攻。

先ほどの口づけには、何らかの能力を上げるきっかけがあったのだらうと、その猛攻を防ぎながら、仮説をたてる。

そして、息吹の拳を鞘で弾き、それによって出来た隙に七天天七刀を振るう。

だが、それは息吹には当たらない。

咄嗟に近付いた昌が、碎けて転がっていたコンクリートの塊を磁力を操って飛ばす！

ゴッパァァァン！ と、力と力のぶつかり合いの衝撃音が辺り

に響く。

威力は相殺したものの、コンクリートの塊は役目を終えたように碎ける。

神裂は一メートルほど押された程度だ。

しかし、それを好機とみて、息吹は畳み掛ける。

空中にて一回転、そのまま、かかと落としの要領で神裂の脳天を狙う！

それに気付き、神裂は多少態勢が悪くとも、その一撃を防ぐために刀を上にする。

直後、ズガァン！ 刀と肉体がぶつかったとは思えない音が響く。「ぐッうう！？」

神裂は、足元のコンクリートに、ヒビがはいっているのを見る。

（一体あれにどれだけの威力が込められていたんですか！？）

次に二人を見やる。

そこには、二人の化物がいた。

化物、もしくは怪物。

チカラ

キャリア

能力を持つ少年と無傷で戦闘経験がある少女。

侮ってはいけない、過小評価するな。

彼らは――

（何者なんですか？）

――吸血鬼とその主なのだから。

幻想殺し 三

人間モドキと吸血鬼モドキ。

彼は吸血鬼と契約を行った、馬鹿な道化で。

彼女は人間と契約を行った、哀れな役者だ。

では、その契約とは？

第一に、人間は、契約を続けている間は主として吸血鬼を操ることが出来る。

第二に、吸血鬼は人間の『命令』を聞かなくてはならない。必ず。

第三に、人間は吸血鬼の『痛み』を味合わなくてはならない。

第四に、吸血鬼は最大時の八〇パーセントの力を封じられてしまう。

第五に、人間は封じられた力を『ある行為』によって取り戻させることができる。

第六に、吸血鬼は主人の周りでしか、残りの二〇パーセントの力を振るうことは出来ない。距離の設定は、主人が決める。

第七に、人間は契約中、年をとらない。

第八に、吸血鬼が主に逆らった場合、未来永劫、自分が最も嫌う苦しみに味合わされる。

第九に、契約は第三者によるしがらみなど、一切の干渉をもてない。持つのは当事者のみ。

第十に、契約を取り消すことは不可能、仮に出来たとしても、それは死あるのみ。

これが大元の契約内容。

その他にも、細々としたものがあるが、今は割愛する。

昌は、契約を行った後に聞かされた、その内容を思い出した。
なぜ今思い出したのか？　と言われれば、思い当たるのが一つ。

――第三に、人間は吸血鬼の『痛み』を味合わなくてはならない。

つまり何が言いたいのかと言うと――

（いてーっ！？　普通に！　普通に痛いです先生！）

顔には出さず、心中で叫んだ。

自分自身、鞘で殴打、超痛い、の後に、痛みリンク、普通に超痛い、死ぬ、の流れで、昌は体中がぼろぼろになってく様を肌で感じた。

というか、油断したら倒れる。

「なあ息吹、頼むから主人の体も労ろうぜ？　痛いんだ、特に背中と腕。痛みがずつと当たってくるから能力も使えねーし、はつきり言おう。邪魔だ」

「何を言っておる、むしろお前様のほうが邪魔じゃ、さっきから横槍さしては返り討ちの連続じゃないかのう、悪いことは言わん、家に帰れ」

んだとゴルアーツ！　やるのかお前様ゴルアーツ！　と味方同士でもめる。

だが敵は待ってくれない。

もめたと同時に、神裂は急接近し、七天七刀を大きく横に振るった。

息吹はそれを避けて、真っ正面から受け止める。

このさい、防御したダメージが昌にも伝わり、彼の左腕が違う間接に曲がりかねたが、こらえた。そしてすぐさま頭に指やり、電撃姫の如く、雷撃の槍を飛ばす！

「くう！」

バチィッ！　と何かが弾けるおとが響く。

それが神裂に当たる音だと気づくにも、数瞬程度必要なほど意外、

というよりも速すぎた。

だが、そこは『特別』な人間。

何万何百万もの電撃を浴びせられても、いまだに立ち続ける。

「……、少々、厄介な能力そうですね」

「大丈夫さ、全てが規格外なあんたよりはマシだ」

それは最もな意見でしょうね、と過信せず、そして謙遜も見せない。

「つーか人間だと普通に気絶するくらいには電撃浴びせたんだが、せめて膝をつくぐらいには期待してたんだけど」

「大丈夫ですよ、私はその程度では止まりません」

明らかに別次元に生きる、超人。

いや、領域などすでに化物のラインに入っている。

「聖人」

唐突に、息吹は言った。

「偶像崇拜の理論によって、人間以上の力をもった、特別な人間じやよ」

「おや、そちらの女性はある程度知識を持っているようですね」

昌に対して、嫌味ともとれる言動だが、仕方ない。

力は示したのだから、退けと言われている。そう感じ取った。

「……剣を納めな、あんたの言い分を聞いてやる」

「そちらも引いてくれるなら」

息吹、と昌は呼ぶ。若干残念そうな表情を息吹は浮かべていたが、すぐ構えを解き、昌の背後に立つ。

助かります、と彼女、神裂は告げて、刀を腰に納めた。

「それで？ あんたらの目的を聞かしてもらおうか」

「私達の目的は、彼女の保護、でしょうか」

「保護？ 拘束の間違いじゃねーのか？」

「最終的にはそうなりますね……、しかし、ニュアンスが違います。私達は彼女を利用しようとか、そういう陰謀めいたことは全くありません」

じゃあ何で、と昌は疑問を呟く。

神裂は躊躇うように、明らかな迷った表情を浮かべる。言おうか言わないか。

「……完全記憶能力、というものを、ご存じでしょうか？」

歯切れが悪い口調で、そう答えた。

「完全記憶能力？ 確か……、目に見たもん全部覚えちゃう便利なやつじゃなかったっけ」

「そうです、しかし、彼女の場合は違う」

彼女は一〇万三〇〇〇冊の魔導書を記憶しています。と彼女は言った。

それも、一目見れば脳をやられるダメージを食らう、オリジン 原典を。

「それによって、彼女は元々記憶できる、八五パーセントを占めてしまい、残りの一五パーセントしか使えないんです」

「たった……一五パーセント？」

ええ、と彼女は繋げて、

「そして彼女は全てを『覚えて』しまう能力がある。雨粒の一つ一つ、そこら辺に落ちているゴミ、木の葉っぱの数、そういった知らない記憶でさえ覚えてしまう」

忘れる、というのは、いわば脳の整理整頓と同じ。その整理整頓ができなくなってしまうと、

「脳がパンクし、彼女は死んでしまうんです」

全く、最低なシナリオだよ、と、自嘲気味に呟いた言葉は、誰の元にも届かず、ただこだまのようにさまようのみだった。

☆☆☆☆

それから二日経った。

何も出来ず、干渉することによって変わる未来が怖くて動けない。大丈夫、アイツは主人公なんだから。と、無理矢理心を抑えて。だがしかし、二日も悩んで叩き出した答えは、あの聖人の言う通りに、言いなりになったということだ。

彼女は言った。あの少女の親友だと。

そして自分が出会っていない魔術師も、少女を大切に思ってくれる、心優しき人間だと。

世の中に、完璧な悪と正義なんて存在しないのはわかる。いや、わかっていたはずなのだ。

世界はそんな、二つの思想だけで出来ているわけがない。むしろ、人の心がそれだけ単純ならばどれだけ救われるか。

彼女たちは、覚悟を持っていた。

親友であろうと、仲間であろうと、大切な人であろうと、それが少女を助ける手段となるのなら。

聖人君子のような『人間』だった。

それでいて、昌はその場を引いた。勝てるわけがない。

同じ人間として負けている相手に、こんなにも差がある相手に。退かざるを得なかった。

中途半端な覚悟で彼女たちの目の前に立ち塞げなかった。

原作介入？ 本を読んでおけばよかった？

何を言っている、馬鹿にしているのか。

これだけの現実を目の前にして、何を下らないことを言っている。強い決意を胸に秘めている相手から、真っ正面から、何がしたいのか、だなんて言われて、昌は答えられなかった。

単純に、覚悟の差だ。

「……なあ、息吹」

それでも、

「なんじゃ、お前様」

それでも、諦めない。

「動かないで後悔することと、動いて後悔するほう、どっちを選ぶ？」

彼は、昌は最初っから、持っている。

何を迷っている？

儂なら、と息吹は口を開いて、

「後悔しない三択めの選択肢を選ぶかのう」

「お前ならそう言うよな」

悩んでいた俺が馬鹿らしくなった、とでも言うように、起き上がる。

「さって、こんなくそつたれな終わりにさせるわけにはいかねーだろうし、とりあえず手札の補充にでも行くかな」

「手札の補充？」

「情報収集だよ」

それも、絶望的な立場から一発逆転のカードをな。と、息吹に言いながら、昌は扉を開ける。

今の昌には、心強い、仲間であり家族であり恋人であり僕であり、しもべなにより味方がいる。

あとはこの先の試練を、乗り越えるだけ。

「行かねーのか？」

「行くに決まっとるわ」

彼女は、何も口答えしない。

言外にそれは、わかっていた、と告げられているようだった。

（全く、本当に良い相棒に巡り会えたもんだよ）

吸血鬼という化物と関わりを持つに、大きな危険というデメリットをもらった。

それに対する、明らかなメリットなど、多分ない。

ただ、これだけは言える。

目に見える『不幸^{しあわせ}』だけが、必ずしも悪いわけじゃない。

数分後、彼らはその場をあとにした。

幻想殺し（前書き）

まずは長い期間を開けてしまい、申し訳ございませんでした。

高校がかなり厳しくて、なかなか執筆する機会が得れなくて、はい……言い訳は鬱々とするので、しません！

言い訳って、醜い人間がするモノだと思います。いつも両親に「言い訳はするなあ！」と怒られています。ダメだなあ……自分。

今回はいずれ出るであろう禁書目録（タイトル名ですよ？）の行間にみたいを考えてくれたら、多分大丈夫かと思っています。

では、あとがき にてまた会いましょう。

幻想殺し

彼は、弱かった。

自分の右手には、どんな力も、果ては神様だって打ち消してしま
う力を持ちながら、目の前の少女に、手をかすことも、助けること
も、何一つとしてやってあげることがないのだから。

むしろ、彼女の記憶の最後に立ち会うことさえ出来ない、本当に
不幸な右手だ。

思えば、彼女との出会いはベランダだった。

彼は、先日による停電によって暑苦しい部屋へと成り果てたところ
で転がっており、食べ物も腐っていたり中身を台所にぶちまけた
り補習があると担任から知らされたり、笑えない不幸に立ち会いつ
つも、気分転換に布団でも干そうかと考えていた。

彼女は、一年前からずっと記憶がないまま逃げ続け、果ては屋上
から屋上へ飛び移ろうとしたときに、なんの間違えか、屋上からど
こぞのベランダに干ささってしまう形になっていた。

彼と彼女は、そこで出会った。

彼、少年は少女の第一声「お腹が減った」という台詞に、それは
もう見事な間抜け面をした。試しに、腐りかけの焼きそばパンを眼
前にやると、見事自分の手ごと食べられ、とても痛かったと記憶し
ている。

彼女は魔術というものを懇切丁寧に、科学で育った少年に教えた。
そして自分がどれだけ危険で、危ない人間なのかも。しかし、少年
はそんなことも気にしないような口調で、彼女の味方になると、言
外で告げる。

だから彼女は言った。

「じゃあ、地獄の底までついてきてくれる？」

再び彼女に出会えた時には、彼女は血まみれで倒れていた。

一体誰が、何のために、そんな犯人を模索する前に、彼は彼女の心配をした。そのあとに、アレが現れた。

「うん？　僕たち魔術師だけど？」

無事、なんとか彼女の容態が安定し、彼は魔術師たちから彼女を守る決意を固めた。

怪しげで妖しい、吸血鬼と言っていた二人組とともに。

それから翌日、見事完全とは言えなくとも、彼女と彼、担任の先生と妖しい二人組、五名で銭湯へ行った。

担任の先生は先に銭湯に行っていて、待っていると言っていた。途中で彼女が怒りだし、先へと早足で行ってしまった。隣の二人組に鈍感と怒られた理由が、彼にはわからない。

その数分後、固めていた決意が敗北と言う名で粉々に砕かされた。相手は善良な人間だった。

だから、彼は言った。

「テメエは力があるから、仕方なく人を守ってんのかよ！？　違っ
だろ、そうじゃねえだろ！　履き違えんじゃねえぞ！　守りたいモノ
があるから、力を手に入れたんだろうが！　テメエは、何のために
力をつけた？　テメエはその手で誰を守りたかった！？」

次に目覚めた時は、担任の先生の部屋だった。

二人組も、完璧な敗北にぐったりとした様子で壁にもたれ掛かっていた。

魔術師と彼女は交渉を始める。

助けるやつが逆に助けられ、助けられるべき彼女が捕まる。

そんなバッドエンドに。

だから彼は抗った。

二人組も、何かないかと外で探してくれた。

そして、三人の努力虚しく、タイムアップになった。
情けない。

情けない。

情けない。

二人組はまだ帰ってこない。

魔術師たちはてきぱきと彼女を『助ける』ため準備を始める。彼女の命を助けるために、記憶を差し出す形で。

一年間の思い出を、消す形で。

最後の情けで、魔術師たちから最後の猶予をくれた。

今回だけは運が良かったようで、丁度彼女は目を覚ました。

だから、彼は言った。悔いなんか残さないように――

「――ゴメン、

俺、強くなるから、

もう二度と、負けねえから。

お前をこんな風に扱う連中、

全部残らず一人残らずぶっ飛ばせるぐらい、

強くなるから……、」

彼は誓った、例え先に記憶が無くなろうとも、それでも誓った。これが、上条当麻の最初で最後の　　だった。

幻想殺し（後書き）

最後の当麻の台詞を打っているうちに、涙が溢れてやばかった…、あの場面があるからこそ、今の当麻がいるわけですから、とにかく特別にしたかった！　それがこんな短い話でも前のやつと繋げなかった理由です。

最後の空白は、読者の想像でおまかせします！　あそこは一人一人によって捉え方が違いますから。

では、また会える日を楽しみにしつつ、この辺にて……

高校でレポート用紙毎週四枚書くって鬼畜すぎる……ッ！　しかもそれとは別に作文もあるって↑え　しか

聖人一

「それで、じゃ……お前様よ」

「はい」

「確か……六時間ほど前には、手札の補充じゃとか、偉そうな台詞を吐いていた気がするのじゃが」

「その通りでございます」

「なぜ、収穫が何もないのじやろうな？」

「スンマセンッした！ 自分がチョーシこいてました！！」

綺麗な、それはもう、不純物を全て取り除いた水のような綺麗な土下座だった。

現在進行形で、昌は頭を下げ、息吹はその頭を踏みつける、俗に言う女王様プレイが炸裂していた。どんな時でも、期待を裏切らない、ダメな今作の主人公である。

「それでじゃ、お前様。何かきっかけでも見つけたかのう？」

「いやはや、それがですね？ と昌はとてつもなく、申し訳なさそうな表情で、言う。」

「根本的に、何を調べるのか、その、わからなくてですね？ つまり「計画がなかったと」……はい」

その答えを聞いたあと、息吹は俯く。プルプルと肩を震わせ、

「この馬鹿主がアアアアアアアアアアアアああああああああああああああああ！！」

どつく、どつくどつく。

「ちょ、やめ、いた、いです、いや、ほんと、マジで、死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ！」

「木山ちゃん？ 先生は先に銭湯さんに行くので、上条ちゃんた

ちと一緒に、ってキャアアアあああああ!? 木山ちゃんし
っかりしてくださいなのですー!」

ガチャ、と昌の部屋に普通に入ってくるやいな、あたふたと、慌
てまくる小萌。荷物はすっかり片付けたので、玄関からすっきりと
居間を見渡せるため、その惨状が如実に伝わったためだろう。

そして、小萌のやめてください発言を受けても、尚昌に攻撃をや
めない、ロリ吸血鬼。

「す、すんま、スンマッセン、スンマセンッ! スンマセンッした
!」 「散々儂にあーだこーだ、果てには勝手に落ち込んで勝手にカ
ッコいいこと言っときながら、なんじゃその様は! 鍛え直してや
る!」 「ひっぐ、ひっぐ……息吹ちゃんが、木山ちゃんの暴力を、
やめてくれないのです……ひっぐ」

謝るサンドバッグと、怒るボクサー（というよりキックボクサー）
と泣きじゃくる高校教師。

「小萌先生? ちょっとインデックスのことで話したいことが――
って何だこのカオス!？」

事態がきちんと收拾されるのは、それから約三〇分後だった。

☆☆☆☆

その場の、大げさにいえば事件が收拾されたのち、上条らに準備
をする、と告げて、昌と息吹は銭湯セットを用意していた。

「しかし、お前本当にお風呂好きだな……、あれか? 吸血鬼っ
つうのはドーナツとかお風呂とか何かしらに固執しちまう耐性でも
もってんのか?」

「ああいや、僕はあまりドーナツは好きじゃないぞ？　ドーナツよりはメロンパンが好きじゃ」

「うるせ、マントから刀でも取り出してろ」

そんな馬鹿な会話を終わらせ、昌は腕時計を見る。

「七時、三三分つと……、後十分くらい時間あるな」

「なんじゃ……、まだそんなに時間あるのかのう？」

そうみたいだ、と苦笑を漏らしながら、昌は息吹に向き合った。

「……、まあ、ここは幸せ星にちなんでよくあること談義でもする
としようかの」

それ英訳したらヤバくね？　と冷や汗全開な昌の心情を気にすることなく、息吹は考える。

「よくあることと言えば、出発する時間より今みたいは何分か残っておると、妙に時間が長く感じるのう」

「確かにそりゃ言えるな、暇潰しを模索してる時間ほど、長く感じる」

「じゃろ？　ちなみに僕は暇潰しがてら畳の一本一本の藁の数を数えておる」

「ホントに暇潰しだな……、俺なら多分寝てると思うぞ？」

「そして出発の時間から数十分経ってから家を出るんじゃない？」

いや、と昌は否定して、

「十分、て念じて寝りゃ……、ちよつきし十分後に起きれるし」

「なんじゃその妙に凄いスキルは！？」

「いや、ホラ、俺って面倒面倒いってるじゃん？　自覚はあまりしてないけど」

自覚しろ、お前様、という健気な僕の願いむなしく、話は続く。

「それで、昼寝する回数が増えるわけだよ、おかげで一年間金曜日は休む皆勤賞をバカなクラスメートからもらい、授業中国語関連は先生に気付かれず寝ること小学生から中学卒業まで一回しか破って

ないし、土日を寝るだけで終わらしたことがあるのだよ」

フツ、とボサボサ頭の前髪を手で払う動作をする。周りにキラキラした背景が見えるのは、昌が成せる幻覚である。むしろそう思わずにはいけない。

息吹はと言えば、

「こ、こやつ……真性のバカじゃ!？」

それを堂々と自慢する昌に向かって、ただただバカだと言いつけた。無論、それが昌に届くことは、天と地がひっくり返っても、あり得ないことだが。

「ま、そんなわけで寝る時間を操る特技があっちゃったりします。

ハイ」

「地味じゃの」

「わかってるよ」

寂しそうな表情を浮かべながら、フツと笑みを浮かべる昌。無論、自業自得な彼に哀れみを覚える息吹ではない。

「しかし、ゲームやら読者やら、そういう没頭できるものほど時間が短く感じるのはなぜじゃろうな？」

「ああ、ホラあれだよ、なんかに集中していると時間に気を回さないからだろ。しかも趣味に没頭するってえと大体時間がかかるもんだし、三〇分だけと決めてたのに実際時計を見ると、二時間経ってた、なんてよくあることだ」

ま、俺はないが、と付け加えた。

世の中にいる時間が守れない奴に対して失礼だと思いながら、息吹は何も言わない。

とうに、昌はいろんな意味で失礼だしデリカシーのない奴だと思っ
ているので、無駄なんじゃな、と理解した、年齢九九九歳のロリ吸血鬼。

「そういや、息吹。お前影にん中にいる時って何してんだ？」

昌に妙な達観した視線を送るのをやめ（俗に言う呆れた目）、銭湯セットを弄ぶ息吹は言う。

「うーむ……、一応は僕^{しもべ}じゃからな。お前様の周りの警戒以外は会話の傍観者に徹して楽しんでおるよ」

警戒？ と昌は首を傾げた。

それに対し、息吹はなぜそこで不思議がるとでも言いたげな視線を送った。

「当たり前じゃろ？ 儂は純血の吸血鬼にて特別な吸血鬼。挙げ句には一番初めに生まれた吸血鬼、前にも言ったはずじゃが『真祖』を契約という名の呪いを与え、更には“あそこまで” 儂を殺し尽くした男がいると判れば、そいつを一目見ようなどと考える者もいるわ。更に儂を尊敬する同志のほとんどはお前様に恨みを買っているじゃろうな」

彼女は笑う、無邪気に笑う。かっかっかといつものように。

それに対し、昌は――

「いやいや初耳なんですが!？」

元座っていた場所から立ち上がり、すぐさま息吹の肩を爪がくい込むほどの力で掴み、前後に高速で動かした!

「いやいや待てよオイ! おかしくね!? いやお前が特別な吸血鬼とかってのは聞いてたけど、ヤバイって! 吸血鬼って大抵死なないじゃん! 不老不死じゃん! そんなのがわらわら来るってなんだよ! はっきり言っとくがそんなの来た日には生きてる自信ないからな!？」

「またまたあ、儂をあれほど圧倒出来れば余裕じゃろて」

「謙遜してねえから!」

そして『アレ』はキレていたから出てきた本能であってですね! と本気で説教モードに移行する昌。例えるなら、何かの広告に載っていた無料会員登録を登録すると翌月は会員費がかかります、と言われているようなものだ。

「ま、大丈夫じゃろ。お前様が死ねば儂は元に戻れることじゃし」

「お前は良くても俺は良くねえんだよ!」

「大丈夫じゃよ、初めての友達で仲間で家族な儂を最後まで見てい

てくれるのじゃろ？」

「待てその話題は色々危険だ、俗に言うネタバレだ」

「かっかっか、まあ大丈夫じゃろて、世の中そういうもんじゃし」

「何がですか!？」

ああもうなんて面倒な奴を匿っちまったんだーっ!？ と嘆く昌。

その部屋にある時計の針が、七時四五分をさしていた。

聖人 二

「なあ昌、風呂上がりつつたら炭酸だよな!!」

「何を言ってるのかなとうまは、こもえからの話では風呂上がりは牛乳に決まってるんだよ!!」

何をー! 何よー! と今時恥ずかしい夫婦漫才を繰り広げている、シスターと某不幸少年。

現在進行形で、今は銭湯に向かう途中だった。

昨日はあれほど塞ぎ込んだのに、なんとも面白い道を歩んでいる。

もっとも、二人の言い争いなど昌に関しては全く関係ない話だが。そんな中からの、途中から振られるよくわからない話。

ただ一言。

(頼むから静かにしてくれ)

二人に聞こえない程度でそう呟いた。

「もう、とうまのバカッ!」

「ギャーッ!!」

と、突然悲鳴をあげる上条。

またデリカシーのない話でもして怒られたんだろうと、勝手に解釈していた昌には、まさかその解釈が合っていた何て言うのは、わからない。

怒ってしまったシスター、インデックスは風を切るが如く、マンガ表現でたとえるならば、ぴゅーッ!! といった音を出しながら去ってしまった。

微笑ましい光景である。

思わず昌はにやけた。上条から見れば、にやけてないで助けて下さいの、なんらかの信号が発せられるだろう。

「目の保養、ありがとうございます」

「オイ、お前にはこれが何らかの癒される空間に見えるのかね?」

見える、とは言わなかった。むしろ無言で頷き、言葉にするよりも肯定しているように、上条は見えた。

「ほら、追っかけなくていいのかい？ 幼い少女を守る騎士^{ナイト}さん」
はっはっは、とどこぞの吸血鬼のように昌は笑った。無論、それを言われた彼からしてみれば、恥ずかしいの一言で埋め尽くされるが。

「しゃーねえな……ってアレ？」

そこでふと周りの、辺りの、景色、光景に違和感を覚えた。

別に街灯が変な方向に曲がっているとか、人混みがあるとかそういう分かりやすい違和感、非日常ではない。

いや、むしろ分かりやすいのだ。

そこは、ここには雑踏の中というにはあまりにも静かだった。学生の数が少ないにしたって、まだ騒がしい時間帯だというのに。

車が走る音がなかった。

人が話す声がなかった。

人の足音がなかった。

すべて、人が関わるものすべてがなかった。

あるのは、無機質な街灯のちよつとしたものや、信号が発する音、ついでにいえば自分たちの音しかない。

静粛。

すなわち、人がいなかった。

「ステイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

ゾツとした。寒気ではない、何かしらの重圧が三人にかかった。

そのうちの二人にはわかる、声色。

その時よりも、今回は重く、そして覚悟があった。

「神浄の討魔、良い真名です」

Tシャツに右太股の根元からばっさり切られているジーンズ、そして異質ともとれる、人の身長より長い刀。

彼女は、上条の名を口にした。それはもう引き戻せない瀬戸際にたたされていると伝えられているように、上条は思った。

女は、一歩ずつ、慎重にそして重く感じるブーツと地面が当たる音が響く。

突然自分の名前を言われ、戸惑っている上条に女は、すみません、と告げて自分の名前を言った。

「神裂火織と申します、そちらのお二方はご存知かと思いますが」

上条は横目でチラリと昌たちを見つめた。その一瞬の間で、上条は『何か』を理解した。

そこには確かに、あの二人の今まで見ていない表情があった。

一人は険しい顔、もう一人は口端をひきつらせて、苦笑いを浮かべている。

警戒してるのだ。

戦闘の素人でさえ、あの女が現れた瞬間にニゲロと、頭を中心に痺れていくような感覚が現れて一種の興奮状態が出始め、警告を出したのだから当然なのだろう。あるいは期待していたのかもしれない。

この二人が、もっと余裕な笑みを浮かべていたのなら、自分もこの不安な気分が紛れるだろうと。

「脇役は、舞台から去るのではなかったのでしょうか？」

「いやいや、脇役にも一応台本があるんだよ」

会話は、続かなかった。

息吹は何のためらいもなく、飛び出し、そして『斬られる』。

「な————ッ!？」

何が始まった、と一名以外は驚きのあまりに、動きが止まった。

(こいつは……鋼糸^{ワイヤー}!！)

いち早くその不可解な現象の原因を突き止めた昌は、そのことを告げようと息吹の側に近づこうとした。

だが、ここで『制限』がかけられる。

「グッ——アアアアアアアアああああああ！！」

息吹が受けたダメージが幾らか昌に襲いかかった。

「昌！？」

目の前で、駆けつくようと走り出す昌が急に倒れ込み、何らかの痛みによって転げ回った姿をみて、突然の出来事に硬直していた体を、無理矢理動かして上条は駆け寄る。

（いきなりの抜刀から不可視の攻撃！？ あの一瞬で一体何が起きたってんだ！！）

上条から見れば、神裂が一度に何度も抜刀し、更には遠くに離れていた昌にも攻撃が行われていたように見えた。

魔術。

その攻撃が、魔術なのだと上条は思った。

体の至るところを切り刻まれたはずの息吹は、すぐに傷が癒された。いや、元に戻ったと言わべきか。

自分の主に行ってしまうダメージの制限に、息吹は唇を噛んだ。たった一人で敵を風ぎ払うのと、誰かを気遣いつつ戦うことの違いが、こうも如実に現れてしまったことに、息吹は腹立たしかった。しかし、今はそんなちっぽけなことに気持ちを左右される場面ではない。

（主さまのためにも、無闇な攻撃を受けるわけにはいかぬ！）
そこからは、一定の距離を保った位置に留まった戦法に切り替えた。

わかっていたのだ。彼女の攻撃が何であるかを。

経験していた。その攻撃を自らの身に刻まれたことがある。

ワイヤー
鋼糸。

たかがワイヤーで、これだけ操れば達人なんてレベルではなく、世界で何人もいないだろう。

だがそれでも、

「フン、主さまよりはまだまだ未熟も甚だしいものじゃ」

神裂の口が動く。

『七閃』と。

瞬間、七つの斬撃が息吹に襲いかかる。

右、左、上、上、下、左、上。

最小の動きで全てをかわし、尚攻めることはなかった。

神裂の動き、いや全てのパラメータからしてこの三人の内に対抗出来るのは、ぎりぎりです。息吹しかない。

ゆえに、自分が戦闘不能となった一瞬で上条らのところに攻められるのは、不利。

息吹が行っている行動は、一つの防壁であり、盾。その後方にいる二人は盾に隠れている矛。

神裂は下手にその先へ進めない。

だがしかし、現状を無理矢理曲げてまで攻めようとする気はなかった。

彼女は戦うためにきたのではなく、ある少女を保護するためにきたのだから、無理をする必要はない。

「七閃」

再び息吹を襲いかかる、七つの斬撃。それを避けて機会を伺う。それだけで、そのたった簡単な説明だけで、彼女たちのやっていることがわかる。

つまり、常人には見えないスピードで、簡単に道路のコンクリートを破壊し、それを七つの斬撃に合わせて放ち、それを大きく避けて、そして触れない程度の動きで避けることを可能とする。

上条には見えない。いや、見えないと言うならば、昌にも見えていない。

勘はいいほうなのか、昌は大体その戦いの様子が伺えた。

傍らにいる上条がその戦いに飛び込もうとする、が、それを昌は止める。

「止めるなよ昌！ このままあの子に任せていいのか！」

「いやいや、上条さんよ……あんなコンクリートの雨が只今暴風中ですよとでも言いたげな領域に入り込める隙なんかあるのかよ」

俺たちに出来るのは、その場の状況が変わった時にサポートすることだよ、と昌は呟き、先を見つめた。

信頼してるのか。

「信頼はしてねーよ、信じられてるのさ。俺がなんとかできるってな」

彼は荷が重いとでも言いたげに笑った。まるで期待するなと言いつつ、ちゃっかり結果は出すような。

「前は俺がでしゃばり過ぎたし、基本的に集団戦は無理っつか、サシだからなあ……俺の場合」

多数のメリットを活かせられないですと言いたげに。

昌はそういう人間なのだろうと、上条は思った。

制限によるダメージが抜けたのを確認し、立ち上がる。

ズボンに付いた砂やゴミを払いつつ、そして見据えた。

その戦いの結果を、あるいは戦闘を。

均衡を、破る——ッ！

上条らのずっと背後から、大きな爆発の音が聞こえた。

それに反応してしまう、息吹、昌、当麻。

その一瞬の隙を逃すほど、聖人は甘くない。

鋼糸を操らず、ただ静かに、そして誰の目にも写らないほどの速さで息吹に近づき、脇腹を刀で殴打し、ふっ飛ばした。

流れるように、神裂が二人を襲う！

「お前さま——！」

吹っ飛ばされ、地面に転がったにも関わらず、無理矢理足を地面に擦り付けて膝をついた息吹は、酸素が残っていない肺から無理に声を吐き出し、危険を呼び掛ける。

だが、遅い。

昌は前を向く時には、もう目の前に来てしまっている。

殴打。

ボールのように飛ばされる。

いや、

（感触がなかった……？）

それは、自ら後ろに跳んで得た結果。

そして予想外の出来事に神裂が出してしまった、油断。

「う、おおおおオオオオオ！！」

上条が右腕を振りかぶる！

放たれた一撃、それを鞘で防ぐ。

高校生の大振りの拳を受け、少しばかり押される。

次に神裂を襲ったのは、前回の戦闘でも受けた雷撃。

例えば聖人といえど、雷の速さにはついていけない。

「がっハァ！」

体中が痺れ、至るところを火傷する。一瞬の脱力感を防ぐ術もなく、神裂はとうとう膝をついた。

「上条！」

追撃しようとする上条を昌は止める。

「ここは俺たちに任せろ、お前は速く爆発んところ行け！」

「……ッ！ わかった！」

主人公はすれ違う。
ヒーロー

すれ違うさま、彼らは会話した。

———三〇分が限界だ。

———充分だ！

聖人 三

「……油断しました」

「いやなに、一応二人がかりだしそんな気負う必要はないと思うけど」

神裂はゆっくりと立ち上がり、上条が見えなくなるまで見送っていた。

それは、諦めの意志ではない、むしろ逆の余裕の雰囲気。

「私にも時間がありません。手早くこのくだらない（……）意地の張り合いを終わらせましょう」

「くだらなくはねえだろ、たった一つの異能を宿す右手を振りかざして小さき少女を守るっていう、感動のお話だろう？」

馬鹿なことを、とでも言いたげに彼女は冷たい眼で昌を見つめた。冷めた眼。

そこにあるのは、挫折した者であり後悔した者であり、なにより悲痛な眼をする人間。

「そんな、夢物語に現^{うつ}を抜かす年頃でもないでしょうに。はっきり言っておきましょう、あなたたちの向かおうとする道は絶望しかありません」

だから、と彼女は告げて、

「私はあなたたちを救います、私に刻まれた、魔法名に従って」

「面白い、やってみろよ。悪いがアイツが諦めねえなら俺たちも最後まで諦めるつもりはねえぞ」

息吹は二人が対峙している最中に、既に主の影の中に潜んだ。

昌が本気で戦うのなら、自分は邪魔にしかねない。実力的には確かに息吹のほうが上であり、この戦いで勝率を優先させるならば、

息吹が戦ったほうがいいだろう。

しかし、そんなことを息吹はしない。

彼女は、主を守る盾であり仲間なのだから。無粋な真似は逆に失礼であり裏切り。

だから彼女は願った。ただただ真つ暗な影という空間の中で、祈る。

息吹がいなくなったことには、既に二人とも気づいていた。

昌は視界の端で長く伸びた自分の影に潜っていく姿を見、神裂は周りの気配から息吹の気配が消えていたのを感じ取っていた。

「さて、手加減してくれよ。神裂火織」

「大丈夫ですよ、すぐ終わります」

彼女の口が動いた。

七つの斬撃が昌を襲う！

それを、磁気を操り作り出したコンクリートの壁を盾にして昌は防ぐ。

斬撃はコンクリートの壁を多少抉っただけだった。

次にコンクリートの壁で覆われていないところを、まるで瞬間移動のように移動し、七天七刀を振りかぶる。

「おわっと！」

昌は地面を転がり、避ける。元々立っていた場所は蜘蛛の巣のようにはび割れ、微かに地面を震わせた。

（あっぶね！）

その攻撃が連続で襲ってくることを怖れ、すぐさま昌は立ち上がり、野球のピッチングのようなフォームで電撃の槍を放つ。

バチン、と何かが破裂するような音が辺りに響く。

だが、今回は当たらなかった。

電撃の槍は、神裂を避けるように、神の左の方に逸れてゆき、最

終的には遙か彼方のビルに直撃する。

「無駄です」

神裂は一步踏み出しながら「貴方の攻撃は遠くから超能力による電撃のみ、そしてその電撃を私の操る鋼糸ワイヤーを使えば、こうも楽に防げるもの」

鋼糸。

電撃を誘導させるように、七本が一つに纏まったものが、神裂の左横に月の光を浴びて煌めくを見た。

恐らく、感電しないためのものが鋼糸、或いは刀についているのだろう。

「もう一度問います」彼女は何も恐れることなく、

「そこを、退いてはもらえませんか」

「……ッチィ！」

八つ当たり気味に電撃を飛ばす。槍のように伸びるそれは、またしても横に逸れていき当たらない。

「つつつはアアアアアあああ!!」

バチバチと頭から火花が散り、無理矢理近くにあった街灯を槍のように飛ばす。巨大な飛来物に神裂は慌てることもなく、ただ刀で真上に剃らす。

彼女はまだ、手加減している。

次に右手を地面にやり、そこら一带にある砂鉄を集め、砂鉄の剣を造り出す。

それを、美琴と同じ方法で鞭のように飛ばす!

「う、らアアアアアアああああ!!」

掛け声とともに飛び出す鋭利な物体。

「七閃」

分散した。

七つの斬撃は、チェーンソーのそれと変わらない砂鉄の剣を、鞭

を細切れにさせたのだ。

勝てない。

そんな考えが頭をよぎった瞬間、美琴との話で聞いたものがあつた。曰く、美琴の異名となった一撃を。

それに必要なものを。

あいにくと『弾』は、奇跡的にポケットの中に入っていた。
なら――、

「やるしかねえよな！」

何かを弾く音が響いた。

それはメダルゲームなどでよく見かける、ただのコイン。そうただのコインだ。

「感謝するよ」

彼は呟く。

「おれはまだ、強くなれる」

独り言を呟き、コインは彼の手元に上手く落ちた。
そして、

「これで終いだアアアアアアア！」

辺りがオレンジ色に一瞬光った。

残るのは、圧倒的な破壊力を纏う、一つの砲弾。

遅れて、轟！！とそれによる余波と砲弾の音がただただ響く。
いや、響くなんてものじゃない。

地面を砕き、抉り、破壊する一撃は、そのまま神裂を襲う！！

光線のような砲撃の線が尾をひくように、飛ぶ、進み続ける。
それは確かに、美琴が第三位なのだ和理解出来る一撃だった。

その異名は――

『超電磁砲』
レールガン

辺りが、コンクリートや地面の小さな破片或いは粉塵を巻き起こさせ、砂煙と化していた。

「……ハァ、とと」

膝から碎けるように、昌は倒れた。

先程の一撃で、大きな脱力感を受けたためだ。

砂煙の先は、見えない。

そのことに、一瞬昌は気を緩めた。だが、

「……危ないところでした」

彼女は、現れた。

無傷、とまでは言えないものの、決して致命傷とはいかない浅い擦り傷程度が見えるほど。

その程度。

昌は今度こそ勝てないと思った。

立とうとする力さえ、その絶望に屈してしまうように抜けていった。

「……誇ってもらってもかまいません、二度と名乗りたくないと決めた私の魔法名を名乗らせたのですから」

魔法名。

それを名乗らなくてはいけない状況まで、先程の一撃は彼女を追い詰めたということ。

「ハッ、皮肉かよそりゃ」

彼は自嘲するように乾いた笑みを浮かべる。浮かべ、そして立ち上がった。

「もう戦う力は残されてないでしょう、なのに何故、貴方は立ち塞がるのですか？」

沈黙が支配する。五秒、十秒、二十秒、永遠とも捉えてしまいそうなほど、その場にいる二人の沈黙は、両者とも長く感じた。

「さあ？」

意外なことに、昌は首を傾げた。

それに対する神裂は、少々イラついたように言った。

「まさか、貴方は正義と悪の二言論で判断してこんなことをしてるわけじゃーッ！」

「ねえよ、そんな使い古された言葉を使えるほど、俺は出来てねえ」では何故、と口早にそう続けた。

彼には、全ての事情を伝えたはずだ。なのに何故、彼はまた立ち塞がる。どうして立ち上がる。

なぜ、どうして、思い返せばその疑問でいっぱいだった。

昌は、そんなの決まってるかと繋げ、

「諦めない奴ってのは、それだけで手助けしちまうもんだ」断言。

「お前らは諦めたんだろ？ アイツを助ける方法ってのを、自分たちで無理矢理決めた『幸せ』をアイツに押し付けてるだけでさ。ハッ、くだらねえ、他人の愚痴を聞くほど面倒なモンはねえよ。前の俺は、ちよいと真に受けすぎたらしい」

「くだら、ないー？」

「ああ、くだらない」

彼女は俯く。必死に押さえてきた、感情の波が抑えきれない。

限界だった。もう人間としての器がバラバラにひび割れ、溜めていたものが吐き出しそうになる感覚に襲われた。

直後、殴り飛ばされた。

「ガーーーーッ!？」

「貴方に、何がわかるというのですか!!」

怒りに満ちた表情で、ただただ殴られる。

それは、どんな斬撃よりもどんな殴打よりも、強くて、悲しい攻撃だった。

「知ったような口を聞くな! 私たちが今までどんな気持ちであなたのこと見守ってきたと思ってるんですか!! 彼女の家族が、親友が、仲間が、恋人がどれだけの思いでその辛さを呑み込んでや

ってきたのか、お前にわかるのか！ わかるんですか！？」
一方的に、殴られる。

「どれだけの思い出話をしようとアルバムを見せようと、彼女は真っ白の笑顔でごめんなさいって謝るんですよ……、これがどれだけ理不尽なことか、貴方にはわかるっていうのか！」

憤怒、怒りが口より先に出てしまう。

「わから、ねえよ」

腕を振りかぶる、だが、他人の血で汚れてしまった拳を、彼は受け止めた。

「わかったら、ダメだろう、が！」

アザだらけの顔を必死に動かし、目を見開いて、神裂だけを睨む。

「それは、それだけはテメエがもってるモンだろうが。自分だけの大切なモンだろうが、それをどっかの不良みてえな高校生にやすやすとわからせていいもんなのかよ、違うだろ！ その思いを、願いを洩らすのは構わねえよ、けどそれを簡単に他人にわからせるなよ。お前は嬉しいのか、ただ愛想笑いを浮かべさせられて自分にもわかるだなんて無責任な言葉を送られて、嬉しいのか」

「————ッ！ 戯言を——！」

掴みとられてる手を振りほどき、今一度殴りかかろうとすり。
だが、

「そこまでじゃ」

後ろからその拳を掴む、小さな少女がいた。

「もう、そこまででいいじゃろ。もう勝負は決した」

息吹は、その汚れた手を離し、既に気絶してしまった昌をその体

格とは合わない力で担ぎ上げ、暗闇のほうへ歩みだした。

「聖人」

突如、息吹はたち止まった。

「自分の痛みなんてものはな、結局のところ自分にしかわからんものなのじゃろうな。このバカしかり、お主しかり、儂もな。それはきっと一つの個性なんじゃよ、だから自分だけの、思い出を大切^{たからもの}にしてくれ。苦しくても、悲しくても、それを理解できるのは当事者だけだからの」

それだけ言って、彼女は去った。

血まみれで涙を浮かべた聖人は、転がっていた刀を掴む。

やることはやる。

彼がまだあきらめないというなら、実力行使でもとどませるしかない。

これ以上、自分たちのような理不尽に合わせる人間を減らすために。彼のようなまだ一般人に、こんな重いものを背負わせるわけにはいかない。

そして聖人は少年と出会う。当然、少年はその事情に憤慨し、いつもと同じく説教をたれる。

しかし、聖人はそれを素直に受け止めた。

理解した。

自分たちはただの自己満足に浸っていただけなのだ。

だから彼女は、少女の記憶が消えたあとは、こう言うだろう。

——初めまして、神裂火織といいます。よければお友達になってくれませんか？

聖人（前書き）

お久しぶりです。約1ヶ月ぶりですね。

なぜこんなに遅れてしまったのか、というのは、簡単に言えばテストやら行事やらが重なってしまった、というしかありません……
本当にすみませんでした！

聖人

へーいらっしやい、ってアンタ！ テメエなんでこんな所にいやる！！

……ハア？ 魔術はもう切り捨てただあ？ それで一振りの刀がほしい！？

おいおい、仮にもあのジャンヌⅡダルクを支持していた騎士団の副団長だろうが、そんなにいいのか？

……ほう、他に支持する奴が出来たのか。まあお前は当時から騎士団の中で唯一反対派だったらしいし、鞍替え——っと、やめろ冗談だ。仮にも一般市民に危ない一撃を与えようとすんな。

まあそりゃあ孤児で日系人だったら、何しなくても騎士団の中で酷い扱いをされるもんだろうな。

まあいいさ、特別としてテメエにもなんか売ってやるよ。

そうだなあ……、居合い斬りを得意とするアンタにはこの鎌威太刀なんてどうだい？

一説には三里先の敵將の首を切ったと言われる刀で、どっかの悪魔の死骸を元に創られたなんていわれてらあ。

切れ味は保証するぜ？

一応霊装として扱うなら、一定の行動から相手を距離に関わらず斬るもんさ。と言っても、これには制限があるようだし、後ろにいる敵を斬るなんてこともできねえ、ちよつとした刀さ。

おいおい、返すなよ。

言っただろ？ ソイツはある一定の行動をしねえと発動しねえもんだからな。

ちなみにその一定の行動についても教えといてやるよ。

あ？

ちげーよ、万が一間違えて発動しちゃったらあぶねーだろうが。とりあえず、……うん、そうだ。それさえ守っとけば発動しない。

しかしまあ、なんで今頃なんだ？

あのイギリスの傭兵にこてんぱんにされたんだろ？　もう復興の目処がたたないほど殲滅されたと聞いてたが……。

……そうか、またあの悪夢を繰り返そうとする馬鹿がいたか。

それで？　アンタ以外に協力者はいるのかい？　ほう、ロシアの……。

そりゃまたいい面構えの奴らなんだろうな、ははっ。

ともあれ、これで閉店とさせとくよ。

アンタも堕ちんなよ、堕ちた時が年貢の納め時だと考えとけ。

………いったか。

極東の聖人を尊敬してるだなんだとほざいていたが、アンタには誰かの下につくより、自分で率いたほうがよっぽど似合ってると思うがね。

現に今のアンタは、俺も含めて仲間をあれだけ集めているじゃないか。

………ったく、そんな情報を仕入れたからには、こっちもなんかやりたくなっちゃまあ。

なあ？　ジャンヌの名を受け継ぐ、若き騎士様よ？

この物語は、まだ語られない。

いや、この物語自体は既に終わっている、が、彼女が吸血鬼たちと出会うちょっとした物語が語られないのだ。

彼女、ジャンヌⅡフェリスを主人公とした物語は、ここで幕を下ろす。

☆☆☆☆

——やあ、久しぶりと言っておこうか。君がこの世界に来たということは、また何か興味に惹かれたものがあつたのだろうか？

——と言っても、あまり無茶をしないでおくれ、まだ私の計画はプラン
君を完全に出現させられるほど進んでいないのだからね。

——まあ、その程度ならば出来るだろう。だが指定範囲は一学区が限界だろうな。まだあの（・・）集合体には感情がインプットされていない。それに、まだあの肩書きだけの計画は続いている。

——わかった。ではまた会おう。

エイワス

聖人（後書き）

次回、禁書目録、でまず一章は終わります。

その次の二章となる話は、至るところに伏線が張っているので、全部回収出来るかどうか、かなり難しいですが、執筆していけたらと考えてます。

では

感想、意見、質問、待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3651m/>

とある化物の拡散力場

2011年7月10日03時35分発行